
魔王城のメイド

中路太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王城のメイド

【Nコード】

N8823S

【作者名】

中路太郎

【あらすじ】

魔王城に勇者来たる！……かも。五百年ぶりにその報を受け（新
聞で）色めき立つ魔族達。好奇心に素直な者、武人の血に忠実な者
様々な反応を見せる魔族たちの中で魔王城の教育係が気がついた。
「……あれ？　なんかウチ汚くね？」こうして「魔王さんちつてろ
くにお掃除も出来てないのね」と言われなかったために魔族に雇われた
人間のメイド、アイルネは見事魔王城の大掃除を完遂することが出
来るのか！？　ただいま、あらすじっぽい煽りがあったことを深く
お詫び申し上げます。

二十三日付パイルアップ紙一面

「勇者一行ついに魔王城攻略……………か？」
若き英雄は自信を漲らせた。

今月二十日。魔王城付近の小さな農村に勇者一行が到着した事が、本紙随伴記者エリック・ピーターソンの報告で判明した。

エリック記者の取材によると、勇者一行は魔王との戦いに向けてこの村で最後の準備中とのこと。

記者の「自信はあるか？」という質問に対しては「なければこんな所まで来ません。……まあ、見てください」と、頼もしい言葉を我々に聞かせてくれた。

意気軒昂たる若者達は、悪の居城へと乗り込み、必ずや我々に平和な時を見せてくれることだろう。

人間と魔族との長きに渡る戦い。

終止符が打たれるのは、そう遠くない事なのかもしれない。

——二十三日付 パイルアップ紙 一面より

第一話 お門違いの妙な心配

「終わるかーい！」

慌しく人が動きまわる中、少女が絶叫を上げた。

そのままペタンと尻餅をつき、世界中の不幸を背負ったような顔で床を見つめる。

結晶石灰岩の嫌味なほど豪奢な床に、薄っすらとエプロンドレス姿の少女が写った。

所々服にある、解れや脂汚れなどが、徹夜続きで疲れた顔や髪にまで飛び火していた。

「はあああ……」

床に写った自分の顔を力のない手で撫でるが、何の慰めにもならない。

そもそも仕事を請けたのは自分だし、誰にも言い訳できない代わりに、誰にも文句を言われない立場にもいるのだ。

責任ある立場と、そこに自分がいることへの自負は、何物にも変えがたい喜びじゃないか。

そう自分を震わそうとするものの、手の平に伝わる冷たい感触が、そのまま世界の自分に対する態度のようで、このまま顔を俯けていると何だか仕事中には流しちゃいけないモノが勝手に目からあふれ出しそうになる。

（ええいつ、弱音は後からでも吐ける！ 涙は終わってからいくらでも流せ！ 間に合わなかった時どうするかは、間に合わなかった時に悩めば良い！ とにかく今は作業を再開させなきゃ…）

「にゃー、何してんのー？」

何とか気持ちを持ち上げて顔を上げてみれば能天気な顔がそこにあった。

疲れなんて微塵も感じさせない潤いのある肌に、静かな川の流れを思わせる艶やかな黒髪。

そこに、気まぐれに輝く飛沫しぶきを飛ばしたような同色の瞳を持った少年が、少女を見据えていた。

「なにつて見ておわかりになりませんか？」

「んゝわかにゃーい」

「……ならしいです」

「あにゃー……」

がつくりと肩を落とした少女に、黒髪の少年は何か言葉をかけようとするが、あうあうと口を開くだけで一向に言葉は出ない。

「ほら、ここに居ると危ないですから、お部屋で遊んでいらしてください」

溜息をつきつつ少女が言うと、ハイと声を上げて、とつと駆け去っていった。

「……この先魔族は大丈夫なのかしら？」

お門違いの妙な心配をしながら少女はまた溜息をついた。

第一話 お門違いの妙な心配（後書き）

にゃー！

第二話 教育係、泣き崩れて台無しにする

事の発端は五日前。

ここは、魔王城の玉座の間。

埃っぽい匂いの漂う広間では、様々な姿をした魔族達が列を成していた。

そこから仰ぎ見る玉座に、つまらなそうに腰掛けた少年の周りを、背の高い美貌の男がグルグルと歩き回っていた。

真珠色の長い髪を神経質っぽく弄くりながら、手に持った新聞に目を落としている。

記事を読みながら、折角の整った顔立ちが、ふんかふんかと乱れる鼻息の所為で台無しになっていた。

やがて足を止めたかと思うと、ダツと窓の方へと駆け寄り、窓枠を音楽家のような指が撫でた。

「いけません、これはいけませんよ……」

こんもりと取れた埃を指に乗せ、男は玉座の横の定位置に収まり、集まった魔族たちに声を張り上げた。

「勇者さんたちがもう直ぐここに来ようかと言うのに、なんなんですかこの城の有様は！」

フーツと指先に息を吹きかけると、結構な重みで埃の玉は落ちていく。

「はにゃー……」

その軌道を目で追いながら、玉座に座った少年が小さく笑い声を上げた。

「はにゃー……ではございません！」

男がキツと玉座の方を振り返った。

かけているインテリっぽいモノクルが光る。

「よろしいですか、陛下。相手の目的がなんでアレ、当魔王城にあつては久しぶりの来客。このような状態で勇者さんたちを迎えようものなら、魔王さんちはらくにお掃除も出来ないのね、なんてご近所で物笑いの種になってしまふこと必至！ それは、魔王様、ひいては魔族全体の沽券に関わることなのですよ！」

「……さあー？」

「あれ？ 今の会話になつてなくね？」

玉座からのやる気の無い返答に思わずタメ語をきいてしまった男は、突然気が触れたように頭をかきむしり始めた。

この、いかにも線の細そうな男は、魔王城の教育係である。

これまで歴代の王達を立派に育て上げて来た古参だが、ここの所どうにもご乱心な事が多い。

それは、玉座で楽しそうに男の奇態を眺めている少年の所為であったが、最近、勇者来るの報まで城に入ったため（といつても新聞で知った）、すっかり胃腸を弱くしている。

「拙者に一つ提案がござる」

ヘビメタ愛好家のように頭をフリフリしつつ、加えて地獄の齒軋りみたいな音が教育係から聞こえてきた所で、若干引いてた魔族たちの列の先頭に居た一人の古老の将軍が玉座の前に進み出た。

「あああゝこのままでは……………え？」

フラワーロック状態だった男が動きを止め、少年が瞳を輝かせる。

「え？ なにな、に”やーっ！”」

気軽に聞き返した少年が、玉座の上で飛び上がった。

抓られた肩を擦りながら、涙目で隣の教育係を睨む。

「なに〜？」

「こほん……言葉使い……」

すまし顔で咳払いなどしているが、髪ボツサボサのお前に言われたくない。

それでももう抓られたくないのか、少年は居ずまいを正すと、せいぜい偉そうに見えるよう胸を張った。

「えーとー……よかろう、申せ」
「はっ」

少年が見下ろすように言い、魔族の將軍は恭しく頭をたれた。
やり取りに満足し、教育係がニツコリ生暖かく微笑む。

わが子の成長を見守る父親のような表情だが、まず乱れた頭を何とかして欲しい。

「拙者が愚考いたします所、メイド、とやらを雇ってはいかがかと存じ上げます」

「メイド？　メイドとは何だ？」

隣にいるストレス過多気味の男の目を気にしてきちんと座っているが、当代魔王の表情の上では好奇心が暴れまわっている。

「はっ。拙者が聞き及んだ所によりますと、何でも屋敷や城の世話をするモノなどをそう呼ぶそうでございます。人間の職業らしいのですか……」

「人間……」

玉座の横で、またしてもヒステリックな爆発が起こった。

「い、いけません！　魔王様、人間どもはそれはもう浅ましく凶暴な生き物と私聞わたくしき及んでおります。しかも！　なんか、ばっちくくてくっさつくて、週に一度も湯浴みをしないこともあるのかなんとか、とにかく不衛生な生き物だそうでございます」

「汚れ具合で言うなら、この城もそうかわらん」

すっかり優等生モードに入った少年は、体に合わない玉座の中で悠々と笑った。

詰め寄ろうとして、機先を削がれた形になった教育係に、頬杖をつきつつ更に追い討ちをかける。

「それに、やってくる勇者どもも人間なのだろう。ならば一度くらい人間とやらを観察していても良いではないか」

およそ三百年。

男が教育係に召し上げられてから、一度もここに人間が辿り着いたことはない。

魔族史観を纏めた書物を紐解いてみると、五百年ぶりの来訪という事になる。

「ま、まだわかりませんよ。勇者がわんちゃんとかネコにゃんの可能性も……」

「犬や猫がどうやって聖剣を抜くのだ？　勇者とは聖剣を抜いた者の事を言うのだろう？」

「に、肉球です！　肉球でぶにゅと掴んでぶにゅと抜いたんですよ！」

この春一番くらいの苦しい言い訳は、一同の冷たい視線にさらされた。

流石にこの冷たい空気を本人も自覚しているのか、ブンブンと首を振ると、慌てて矛先を変える。

「だ、大体、ここにはサキュバスお片付け隊がいるではありませんか！　彼女達はどうしたのですっ！？」

サキュバスお片付け隊は、城の中の雑事、主に家事などを取り仕切る者たちのことである。

そもそも彼女達がしつかりしていれば、こんな事であたふたする必要もなかったはずなのだ。

しかし、少年は一度大きく首を振ると、困惑を露に手を振った。

「あれらはダメだ。どうしてか俺の事を寝所に誘うばかりで、一向に仕事をせん」

良くわかっていないような魔王の言葉に、ガクツと教育係の膝が折れた。

「くっ、性^{さが}が、サキュバスの性が憎い！」

どこから取り出したハンカチを悔しそうに噛んでいる教育係を放っておいて、当代魔王は跪く古老の將軍に命じた。

「では、そのように計らえ。どうやら勇者どもが来るまでそう時はないようだ、急ぎ俺の前までメイドとやらをつれて来い」

「はっ」

主従の惚れ惚れするようなやり取りを、泣き崩れる教育係が台無

しにしていた。

第二話 教育係、泣き崩れて台無しにする（後書き）

今回はその話の末尾の文章をモジってサブタイにしております。

第三話 少女——アイルネ

「お世話になりました」

人間の国。

とある貴族領にある屋敷の玄関先で、少女は深々と頭を下げた。

「こちらこそ、世話になったよアイルネ。君は私達家族に本当に心を尽くし、よく勤めてくれた。もし、この先勤め先が見つからないような事があれば、まあ、そんな事はないだろうが、いつでも戻ってきなさい」

敷居の向こうにいる初老の紳士が、気遣わしげに笑いながらそう言ってくれる。

眦に浮かんできた涙を指ですくって、少女はもう一度頭を下げた。顔を上げると、彼の隣に隠れるようにして立っていた少年が、もしもじとしながら手を差し出してくる。

ん、と無言のまま突き出された手の中に見えるのは淡い彩り。

「お坊ちゃま、これは？」

手に握られていたのは、黄色い小さな花だった。

腰を屈めて視線を合わせると、そばかすの浮いた頬に赤みが増した。

「お前にやる。綺麗だったから、お前が喜ぶと思って」

そう言って花を渡し、照れたように父親の足元に隠れてしまう。

思わず少女の胸が詰まった。

目を瞑って花の香りをかぐと、胸いっぱいこれまでの思い出が蘇えってくる。

思えば、最初は随分と嫌われていたものだ。

ここに来たばかりのころ、まだ母親を亡くしたばかりだった少年は、誰にも深く心を閉ざしていた。

少年の頑なな態度に、古参のメイド達も匙を投げていたのだが、辛抱強く優しさを示し、時に厳しく接して本心をぶつけ合ったおか

げで、今ではすっかり彼女に心を開いてくれている。

（もう、お別れなのね）

時の移ろいの速さに、一抹の寂しさが少女の体を過ぎっていった。
「もう行きなさい。馬車に間に合わなくなってしまうよ」

少年の頭を撫でながら、館の主人は微笑んだ。

この屋敷との契約は今日までの事だった。

本当はもっと長く勤めていたかったのだが、事情があってそうも言っていられない。

後はいつものように、紹介してもらった別の家へと旅立つだけである。

「はい。今日までありがとうございました。こちらでお世話させていただきました。アイルネは本当に幸せでした」

少女が最後に微笑むと、父親の膝を抱えるようにして顔を押し付けていた少年がこちらを振り返ってきた。

「……アイルネ、絶対にまた来い」

「……はい！」

力強く頷いて、少女は歩き始めた。

街道へと続く道を歩きながら、少女は振り返りそうになるのを何度も我慢した。

背後で少年の泣き声が漏れ聞こえてきて、それが寂しくて誇らしかった。

小さな花をぎゅっと胸に抱く。

（もし、この先、私の旅が終わって、その時にお坊ちゃまが私を必要としてくれたなら、アイルネは必ずここに戻ってまいります）

そう心で呟いて、少女——アイルネは歩き続けた。

第三話 少女——アイルネ（後書き）

本日のbgmは奥田民生さんの『And I Love Car』
でございました。

第四話 街道は大騒ぎ

街道に合流して、数分がたった。

空は曇っていたが、ちらほらと駅馬車を目指す人の姿が見え始め、さらにその客を目的にした出店が並び、道は賑やかさを増し始めている。

気前良くばら蒔かれる客寄せの啖呵に、足をとめる人の姿も多い。ごった返す人の隙間を縫うように足を進めながら、アイルネは何度目か花を見つめて微笑んだ。

通りすぎる人影を避け、甦るように香りが届く。

笑みを深くしながらしばらく歩いていると、雑踏に混じってアイルネの耳に不思議な音が聞こえてきた。

何か…布をはたいているような。

ばさりばさりと、一瞬ごとに徐々にうるさくなっていく。

足を止め音のする方——空を見上げた。

見上げて絶句する。

道行く人や、露店の人間までとつくに気づいていたようで、同じように空を見上げては、そこで固まってしまっていた。

（なに……あれ？）

アイルネがそこに見たのは、半裸の男が空から降りてくる光景だった。

危険なローアングルをものともせず白い布だけを雑に腰に巻き付け、背中からは大きく二枚羽の白い羽が伸びている。音の正体はアレだ。確信を得るまでもなくそう思った。

非現実の欠片が雲間から侵入していた。そこからは円錐の光が兆していて、着地点に大きな眩い輪を描いていた。

先程から、なんとなくくいやな予感がするのは、やけにそいつと目が合うからだろう。

お伽話に出てくる天使のように降臨しながら、そいつはまさしく

アイルネの方をチラチラと窺っていた。

（わ、私じゃないよね。私知らないもんねこんな人）

そもそも人かどうかもわかんないし。

謎の視線の直撃を受けながらも、そう自分を誤魔化そうとする。

男は呆気に取りられている地上人たちを意に介した様子も無く、ゆっくりと着地を果たした。

ザワッと蜘蛛の子を散らすようにして、人垣ができる。

着地する瞬間一際大きく羽ばたいた所為で砂埃が上がり、茶色い視界の中で彼は跪くみたいにしてバランスをとった。

転瞬の後、街道に沈黙が流れた。

砂埃がしつこく残る中、男が人ごみの中のアイルネの方を振り返る。

バチっと、いたずらっ子のような目と目があった。

（私じゃない、知らないこの人、私じゃない…）

「あんだ……メイドのアイルネだろ？」

（わたしじゃな……私だッ！！）

やけに通る声で、男はまっすぐにアイルネの方を向いて問いかけてきた。

「い、いえ、人違いではないかと…」

気が付くと、周りの視線が集まっていた。

アイルネは片手で顔を隠しつつ、首を縮めながら、思わずそれを横に振っている。

空から半裸で降ってくるような知人を持ったアイルネは、多分自分のことじゃない。

「いやいや、そうだって。さっきの感動的な別れの場面すっかり見せてもらったぜ」

どうやら、先ほどの別れのシーンを見られていたらしい。

（くっ、感動的な、感動的な別れの場面が憎い！）

どこから取り出したハンカチを悔しそうに噛んでいるアイルネを無視するように、男がこちらに歩み寄ってきた。

第四話 街道は大騒ぎ（後書き）

おやすみ前投稿。

では、おやすみなさい。

第五話 5分

地を這う大蛇のようになっっている街道をはるか見下ろして、アイルネはぞくりと背筋が緊張するのを感じた。

ここから落ちてもしたら、一体どうなるのだろう。

多分死ぬと思うのだが、こんな高さから落ちた知人はいないので、やはり落ちてみなければ分からない。

それでも、どこかに得体の知れない恐怖心はあるようで、なるべく視線を下にしないようにしながら、アイルネは男に声をかけた。

「あ、あのう、それで私にお願いとは一体なんなんでしょうか？」

そう言った途端、ふと、アイルネは可笑しくなる。

お腹のあたりが熱くなり、笑いの衝動がこみ上げてきた。

笑声を聞きとがめた男が、怪訝そうな顔付でこちらを見てきた。

「どうした？」

「い、いえ、なんだか可笑しくて、私は今空を飛んでるんですね」
考えてみれば良く分からない状況だ。

人かどうかも分からない有翼人に拉せられ、まるで獵師に仕留められた獲物のように小脇に抱えられた体は、だらりと四肢を落としている。

それも、ワケも分からずつれてこられた空の上で、何か頼みごとを聞こうとしているのだから、改めて思うまでもなくコレほど奇妙な体験もないだろう。

今この瞬間だけでもしれないが、お坊ちゃまにいい土産話が出来たとすら考えた。

「いいね、肝の据わった嬢ちゃんだ」

「じよ、嬢ちゃんはやめてください。……多分事態を飲み込めてないだけです。ですから、もし突然叫びだしても、お手を離さないで下さいましね」

男の感心したような声にも、なんとか冗談を返すことが出来た。

笑った事で、幾らか余裕が出来たらしい。

「それならいくら叫んでも良いようこの辺で降りるか」

男はどこか嬉しそうにそう言っていると、右肩を四十度ほど地面の方へと傾けた。

返事をする暇も無く、グンツと前後に力が掛かる。

バサリと一度羽ばたく音がして、ゆっくりと高度が下がり始めた。近づいてくる地上を、なんだかちよつとだけ残念に見つめながら、アイルネは黙って男の意思に従った。

「到着」

地面に足が付くと、男は腕から力を無くしてくれた。

唐突に重力の蘇った体は、どうしてか妙にふらついている。

「な、なんだか体がゆらゆらするのですが」

幸いな事に、この場には二人が空から降りてきても驚く人間はいなかった。

アイルネの言ったことを覚えてくれていて、わざわざそういう場所を選んでくれたらしい。

「ああ、無理もねーな。空を飛んだ事で今は頭と体の感覚にずれがあるんだろ。しばらくすりや治る。……さ、存分に叫べ」

どこまでも生真面目にそう言い手を広げる男に、アイルネはポカんと口を開けた後、再び声を上げて笑い出した。

なんだか、本当に叫びだしてしまいたい気分だった。

不思議そうにキョトンとしている男の顔を見て、笑いの衝動がまた顔を出し、詳しい事情を聞くことが出来たのは、それから五分程たってからだった。

第五話 5分（後書き）

試みは兎も角サブタイが誇大広告気味。

なんとなく緊迫感溢れるタイトル。でも全然溢れてない。溢れない。

本日のbgmはHi-STANDARDの『Please please please』でした。

第六話 小一時間のちい散歩

「で、では、私に魔王様のお世話をしると仰るのですか？」

「詳しくは魔王城の、な。それも期限付きで」

男は頷くと、そう付け加えた。

「は、はあ」

ため息のような返事をする、へたりと腰が落ちる。

男は、アイルネが落ち着くのを待ってから、自分が魔族である事を告げた。

どうやら名のある將軍の部下らしく、この姿も人間を欺くためのものらしい。

しかし、余計に目立っていたと思うのは気のせいだろうか。

「搜索の途中あんたの噂を耳にしてさ、こうしてお願いに来たんだ」

「あ、いえ、私なんて、とても……」

恐縮しながらアイルネが言うと、男は笑い声を上げた。

「謙遜するなよ。雇い主との関係といい、さっきの胆力といい、魔王城のメイドにぴったりだ」

と言われて、果たして喜んで良いものかどうか。

それについて返事は濁しておいて、アイルネはもう少し話を詳しく聞いてみることにした。

「それで期限と言いますけど、どのくらいの事なんでしょうか」

「時間が無いのは確か、けど、それは相手の都合にもよるだろうな」

「相手の方……ですか？」

言いかけたアイルネの目の前に、パサリと新聞が投げ出された。

どうやら大衆紙らしく、ケレン味のある見出しが、紙面に大きく踊っている。

鞆など持っている様子はないので、まさか、その布の中にあつたものだろうか。

何となく敬遠したくなる気持ちを抑えつつ、思い切って新聞を拾

い上げると、アイルネはそこに目を通した。

「勇者一行遂に魔王城攻りや……………これは……………」

「…………もうすぐ勇者が俺たちの城に乗り込んでくるらしい」

男は嬉しそうにパシンと拳を鳴らした。

流石に武人らしく、闘争の匂いを察するとどうにも血が騒ぐようだ。

「で、勇者達を迎えるにあたり準備を始めていた所、どうにも魔王城の手入れが不十分でさ。あんまり、みつともない姿も晒せんつー事で、人間のメイドを雇うことに相成ったと」

なるほどと頷いてしまふ辺りかなり状況に飲まれているのかも知れない。

要するに、魔族は魔王城を清掃するハウスキーパーを求めているようだ。

それも、即戦力レベルで、加えて人物に信頼のおけるもの。

魔王城にも家事一切を仕切る者達はいるそうなのだが、能力に不安があるため、そういった事に慣れた人間のメイド——つまり自分に白羽の矢がたったというわけだ。

大凡の事情を聞き終えて、アイルネは頷いた。

（これは…………神様がお与えくださったチャンスなのかも）

胸の中でそう思っ、顔には笑顔を作った。

ずっとずっと燦っていた暗い炎が体の内側で一瞬勢いを増した。

「…………分かりました。そういう事でしたらお引き受けさせていただきます」

「ホントか！？」

無邪気に喜ぶ魔族の男の姿を見て、スツと心が冷めていくのを感じながら、それを微塵も感じさせない表情でアイルネは微笑む。

「つきましては、これから向うはずだったお屋敷に、お断りのお手紙と、それから、代わりのメイドの手配をお願いしたいのですが」

「分かった。あんたの良いようにさせてもらっ」

こうして、アイルネは魔王城へと赴くことになった。

人間たちが気の遠くなる思いで進む魔王城への旅路を、小一時間という短い散歩並みの移動時間でこなし、到着したのは日の暮れ掛けている頃である。

第六話 小一時間のちい散歩（後書き）

というわけで、おやすみなさい。

第七話 ケラケラ

一方、こちらは魔王城。

「な、なんだか落ち着きませんね」

玉座の横では、教育係が不安気に呟いていた。

先ほどから、頬に掛かる真珠色の前髪をくるくる指でやってみたり、身につけた礼服の裾を弄ったりしながら、そわそわといかにも落ち着かない。

「そうかにやー？」

対して、魔王陛下は悠然としたものだった。

マント付きの黒い礼服に包まれた体は、ゆったりと玉座に預けられている。

ただ、身の内の興奮を表すように、瞳だけがらんと輝いていた。

「や、やはり今からでもサキュバスお片づけ隊を総動員すれば……」
往生際の悪い事を言いかける教育係を、魔王の言葉が遮る。

「でもー、忙しそうだよー」

「はい？」

そう言われて視線をやれば、そこには、現魔王就任後初の魔王城への人間の来訪ということ、城内に増員した警備兵達に対して、モーションを掛けまくるサキュバスたちの姿があった。

「ねえええ、こんな所でつつ立つてないで、私たちと良い事しましょうよ」

「じ、じじ自分は現在職務中で、あ、あり、あり！　そ、そそそそのような破廉恥なことは！」

「やだあ、破廉恥ってなに考えてんのぉ？　…それに破廉恥かどうか、試してみないと分からないでしょ？　ちう？」

「きゅ、きゅ……」

……きゅ、じゃねえよ。

一瞬でゆだってしまった警備兵の一人が、貧血を起こしたようにドサッと倒れた。

「ほらあゝ、ね。だいじょぶ、気持ちいいよ。……かぶ？」

「……っ……！（ばたり）」

別の一隅では、正面からぴったりと体を密着させたサキュバスが、無口な兵士の首筋に甘噛みしていた。

沸騰したように顔を真っ赤にした兵士は、額に手の甲を当てるとくるくると回るように昏倒する。

一体、どこからどうやっていつの間に入ってきたのか……誘惑するサキュバス達に、次々に籠絡、というか気絶させられていく警備兵たち。

それを目の当たりにして、教育係はげっそりと肩を落とした。

（ま、魔族のくせにどれだけ初心つひぞろい何ですか……）

心なしか、髪 of 艶まで失っているようである。

勇猛なことにかけては他に類を見ない魔王軍だったが、ここまで女の色香に免疫がないのはさすがに予想外だった。

（……この城を陥落おとしすのに武器は要りませんね……）

彼らがだんだんだの男子中学生に見えてきた教育係は、いつの間にかズレていたモノクルを直し、ぱんぱんと手を鳴らした。

警備兵のうち、まだ辛うじて意識を保っている者達が、ハツとしたように姿勢を正す。

「しっかりなさい！ 魔王陛下の御前ですよ！ 全く情けない！

あなた達がそんな体たらくで誰が一体この城の安全を保つというのですか！ それとも城の警備まで人間の兵士に依頼しますか！？」

普段はヒステリックに響く教育係の声が、この時ばかりは重々しく辺りを打った。

場が、しん、と静まりかえ

「ねゝ、あんなおじさん無視していいからあゝ」

らなかつたけど、憑物が落ちたように、警備兵たちは表情を改めていく。

「気を失っているもの達を叩き起して仕事に戻りなさい！」

「は、はっ！」

体にしなだれかかるサキュバスをどかし、胸の前に手を当てる敬礼をして、警備兵たちは慌ただしく動き始めた。

気絶している仲間を助け起こすと、各人それぞれの持場へと戻っていく。

その様子を見て、一度溜息をついた教育係は、今度はあゝと名残惜しそうな声を上げるサキュバス達に対して、音のしそうなほど厳しい視線を向けた。

「あなた達もです！ ゲストルームのお掃除を言いつけてあるでしょう！ いつまでもそんな事をやっていないで、とっととお客様を迎える準備をなさい！」

そういう教育係に対し、サキュバスたちは分かりやすいブーイングを返してくる。

「だって～お部屋のお掃除ってつまらないんだもん」

「そ～そ～、ぜんぜんセクシーでもないし」

そう言って、唇を尖らせるサキュバス達。

額を手で抑えながら、教育係が震えた声を出す。

「お、面白くてセクシーなお掃除ってなんなんですか…。そもそも、世の中大概のことがエッチくも面白くもないんですからね！」

モノクルをキラリと光らせて、真珠色の髪をした美形がそんな事を叫んだ。

教育係とはいえ、何故自分がこんな事まで教えているのか、不思議でならない。

それでも、彼女たちがいつまでもこのままにいるのを性格上無視できないし、なにより放っておいたら城が機能しなくなる可能性がある。

自分が教育係に召し上げられて初めて人間が訪れるという時に、余計なことで頭を悩ませたくはなかったが、言わずにおいた場合の被害を考えれば、喉を枯らす価値もありそうだった。

「ちえゝ行こ行こ」

「マジ空気読めてなゝい」

「また今度遊ぼうねゝ陛下」

「……死ねジジイ」

「聞こえてますよ!」

ダラダラ退室していくサキュバス達を、肩を怒らせながら追っ払っていた教育係の耳に「にやははゝ」とのんきな笑い声が聞こえてきた。

振り返ると、敬愛すべき魔王陛下が、満面の笑みでこちらを見ていた。

「……なにか、面白かったですか?」

「うにゃー、割とー」

ケラケラ心底楽しそうに笑っておられる魔王陛下を前に、膝を落とし、がつくりと頂垂れる教育係であった。

第七話 ケラケラ（後書き）

読んでいただいております。

第八話 優秀な侍女など

重度のストレスから、キューティクルがハパーセント程低減している教育係とは違い、アイルネの空の旅路は至極快適なものだった。耳に聞こえる風の音は激しかったが、風防の魔法でも掛かっているのか、魔族の背に乗っているアイルネの体にはなんら影響もない。しばらく飛んだ後、景色が高度を下げてきたかと思うと、拍子抜けするくらいあっけなく、眼下に古風な城が見えてきた。

（あれが……魔王城……）

どこまでも続くかのような平地に、唐突に現れた巨大な姿。城壁などのたぐいは一切無く、幽霊のように忽然と現れた印象があった。

その上空で、彼女を乗せた魔族はゆっくりと旋回を始める。

ここから見えている限り、城には特別打ち拉うちひきちがれた様子もない。

確かに古めかしくはあったが、少なくとも外観からは、分かりやすい壁の穴とか、外壁にビツシリと蔦が蔓延っている、なんてことはなかった。

一先ずはそれにホッと安心する。

と、いった所で、視界に写っているのはちよつと高級なドールハウスくらいのサイズの城で、これがもう少し大きく見えた時の感想がどういうものかは、その時になってみなければわからない。

それに、城の内部のこととなるとここからでは何一つ分かりようがなかった。

結局、出たところ勝負なのだ。

「……ヨウちゃん…嬢ちゃん」

「え？」

しばらくそんな風に観察していたアイルネは、魔族の声で現実に戻された。

「大丈夫か？」

「は、はい」

ずっと声をかけてくれていたらしく、こちらに首だけ振り向きながら、魔族は城の一隅を指さしていた。

見ると、壁面の一部にポツカリと大きな窓があき、そこから、なにやら無数にせり出した、細長い栈橋のような物が伸びていた。更にその内の一本を指差して、再び魔族が顔を向けてくる。

「あそこに降りるぞ」

コクリと頷いたものの、果たしてどのような心構えでいればいいのかもわからない。

とりあえず、魔族のクビに巻きつけた腕に力を込めて、目をこらすことにする。

「どうぞ。それから、嬢ちゃんはやめてください」
「了解」

律儀に否定してくるアイルネに苦笑しつつ、魔族が頷く。

水平だった体が垂直に変わり、足を下に着陸態勢に入る。

重力の向きが変わり、重心が矢印の方向を変えた。

栈橋の先には、ガイドらしき男が立っていて、両手に握った白い旗を先程から記号的に振っている。

それに従うように軌道を整えながら、魔族は着地を果たした。

魔族の背から降り、再び地上と再会を果たしたアイルネは、その場で背筋を伸ばした。

旅の疲れは然程でもなかったが、緊張が体を強ばらせていた。

大きく背骨がなる音でふと我に返り、顔全体を赤くする。

「陛下に急ぎ伝える。命に従いメイドのアイルネを連れて来た」
「はっ！」

魔族は傍にいた兵士に厳しくそう命じると、アイルネの方にくるりと反転し、にっというたずらが成功した子どものような笑顔を向ける。

「さ、もう部屋の用意はさせてる。そこで着てるものを着替きかえて、陛下に会ってくれ」

その言葉にぐつと身を引き締める。

いよいよか、と思うと同時に疑問がわいた。

そんな風に動ける侍女がいるならば、自分の役目はないのでは？
アイルネはそう思ったが、残念ながら、そこで彼女を待っているのは優秀な侍女などではなく、ちよつとエツチな夢魔たちなのだ。
た。

第八話 優秀な侍女など（後書き）

本日のbgmはMr Childrenの『Q』でした。
名盤。

第九話 少々冷静さを取り戻した

「つ、ついにホントに来たんですね！ ああ、どうしましょう！
だ、誰か！ 急いで私の部屋から毛布を！」

メイド来たるの報告を受けた教育係が一瞬で色をなくした。
パニックだったのである。

包まれていると不思議と心が落ち着く毛布を兵士に取りに走らせ、
自分はうろつろつとその場を徘徊し始める。

「落ち着け、落ち着きなさい……！ 大した事ではありません、いつ
も通り、そう、平常運転です。は、は、初めて魔王陛下にお会いし
た時のことを思い出すのです……あの時に比べればこんな事何でも
ないではないですか。たかだか、に、人間の小娘一匹……そう、に、
人間なんなんんん」

だいぶクライマックスな状態にあらせられる教育係だったが、こ
う見えて結構えらい人である。

加えてその美貌が無残に崩れる姿（半笑いでヨダレを垂らして白
目を剥いてる）に、新米のまだ事情に明るくない兵士達はただただ
あつけに取られ、古株の賢明な兵達は素知らぬ顔で見つめふりを
貫いた。

魔王陛下に至っては、もはやこの状況に一ミリの興味も示してい
ない。

好奇心の向かう先は、初めて目にする人間、ただ一点である。

「まだかにやーまだかにやー」

瞳の中に星を輝かせながら、玉座の上で落ち着きなく揺れている
魔王の前に、急ぎ足でやってきた兵がひれ伏した。

「し、失礼いたします」

「いーよー。で？ で？」

「はっ、おいでになられました」

「にや！ キター！」

魔王が飛び上がった。

そんな、まだ毛布が！　と口走る教育係を無視して、大喜びで謁見を許可する。

「入って入ってー」

「はい、失礼いたします」

呼びかけに応じて、楚々とした声が返ってきた。

あわあわと両手を振りながら、玉座の横、いつもの定位置へとおさまる教育係。

そこには、親しみ易すぎる魔王陛下の態度を改める余裕すらない。コホンと咳払い一つで空気を変えようとするが、その後ゴホゴホと咽てしまう。

……扉が開いた。

誰かが、ほう、と溜息をつく。

そこに立っていたのは、麗しき美少女だった。

少しだけ胸元の開いた淡い桜色のドレス。

肩口からドレスを螺旋状に降りる一条のフリルが小さく風に揺れて、花びらが落ちるような可憐さがそこに見えた。

中途半端に長かった髪は丁寧に梳られ、後ろで纏めてアップされていた。髪留めは銀。モチーフは鳥の翼。

面にはうつすらと化粧が施されていて、社交界デビューを思わせる初々しくも立派な淑女がそこに立っている。

……ただ、

あっけに取られる一同の中、くいつとモノクルを直しながら、

「……えーと、これが、メイド、なのですか？」

少々冷静さを取り戻した感のある、教育係のもっともな疑問であった。

第九話 少々冷静さを取り戻した（後書き）

短めですけど。

予約掲載というのを初めてやってみました。

やった事がなかったのやってみたんですが、本当はどういう時に使うのが正しいのかが全く分からない…。

第十話 もちろん彼女たちは頓着しない

半裸の魔族とは魔王城に着いてすぐに別れる事になった。

彼は近寄ってきた兵士になにやら耳打ちをされると、一瞬イタズラを思いついたような楽しそうな顔になった後、何事もなかったように直ぐに表情を戻した。

申し訳なさそうにアイルネに向かって手を合わせる。

「悪い。これから行かなきゃいけないトコが出来た。部屋までの案内はコイツに任せるから」

そう言つて、耳打ちしていた若い兵士の襟首を軽々掴み上げると、ずいっとこちらに押し出してきた。

「あ、いえお気になさらず……」

「本当に悪い。じゃ、また後で」

忙しなく言つた後、彼は急ぎ足で城の中へと入っていった。

（お礼……言いそびれちゃった）

去っていく背中を見送り、何となく残された兵士と顔を見合わせる。

「……では、案内をお願いしますか？」

「は、はい！」

曖昧に微笑んだアイルネに対し、彼は最敬礼で応える。

そうして、緊張しているような若い兵士に、滞在中に充てがわれた部屋にアイルネは案内された。

魔王城の内部は、全ての尺が少しづつ大きいことを除けば、特別珍しいところのないありふれた石造りの城だった。

コツコツと靴音を響かせながら、二人は無言で廊下を歩く。移動中どうしても目が行ったのはその城内の惨状だった。

廊下の隅に固まった埃、どこからか吹き込んできた枯葉。などは可愛いもので。

口の大きくかけた壺、頭のない銅像、元がなんなのかすら分から

ないオブジェなど、壊れた装飾品などが辺り狭しと転がっている。

他にも、掛けられた絵はかたっぱしから傾いていたし、宴会でも開いたかのように食べかすや汚れた食器類が廊下にまで散乱していた。

（これはお仕事のしでがありそうね）

そんな雑感を抱いている内、広い廊下に出た。

四角く切り取られた窓から差し込んだ光の端が、幾つか閉じた扉を照らし出す。

その内の一つを若い兵士がノックした。

「どうぞ」

中から声が聞こえると、彼は脇にどいてアイルネに進路を開けた。アイルネは一度頷き、ノブに手をかけゆっくりと扉を開く。

そこで待っていたのは、肅々と佇む侍女たち…… などではなく、お色気たつぷりのお姉さんたちだった。

その部屋はどうやらゲストルームらしく、立派なツインベッドを筆頭に調度品はひと通り揃っていた。

中でも一際目立つのが、両開きの大きなクローゼットで、部屋の入口から左手、大きく口を開いたそこには、ここから見ただけでも無数と言っていい程のドレスが下がっている。

宝を守る番人のように扉の両脇には二人の女性が立っていて、アイルネと目が合うとにこりと首をかしげて微笑んだ。

「いらっしやい」

扉を開いた格好のまま、呆然とそんな光景を見つめていた直ぐ傍で声をかけられ、アイルネはハツとしてそちらを振り返った。

思わず、うつ、と仰け反る。

そこには、胸元の大きくあいたシャツの上から、白衣を纏った女性立っていた。

ふつくらとした唇にわずかにウェーブした長い髪。

瞳は赤く不吉な夜の月を思わせ、垂れ目がちなアイラインを長い睫毛が縁どっている。

ゴージャスカつエレガントな肢体は、バン、キュ、ボンのワルツを踊っていた。

おそらく彼女も魔族なのだろう、艶やかに笑った口元に犬歯が鋭い。

彼女はアイルネの肩に後ろから手を置くと、耳元に顔を寄せながら、小さく呪文を唱えるような儼かさでささやいた。

「それじゃあ、早速綺麗になっちゃいましょう……」

語尾に振られた三点リーダが意味深だ。

「……はい……」

あ、あの？ と問いかける暇もなく、元氣よく返事をしたその他のお姉さん達に両脇から抱え上げられた。

そのままズルズルと引きずられていく。

目指す先は大きく口を開いたクローゼット。

クローゼットに窓はないが、内部にも充分な照明が効いていて、部屋の中と遜色なく明るかった。

むしろ、洋服に使われたラメ糸などの照り返しで余計に綺羅びやかに輝いている。

「大丈夫、私たちに任せておいて……さあ、始めるわよ」

「……キラッ……」

ポーズ付きで合いの手を入れるお姉さんたち。

喜んでエー！ みたいなものだろう。

「あ、あああ……！」

戸惑いから意味をなさない音が口から漏れ出る。

勿論そんなモノに彼女らが頓着してくれるはずもなく、ゆっくりと扉は口を閉じた。

第十話 もちろん彼女たちは頓着しない（後書き）

本日のbgmはthe pillowsの『インスタントミュージック』でした。

第十一話 アイルネ、ちょっとだけ泣きたくなる

そうして出来上がったのがこの姿である。

全身鏡の前で変身した自分の姿を呆然と見つめていたアイルネに背後から近づき、

「素敵……食べちゃいたい……」

そう言つて、ぞぞぞつと背筋が泡立つような目付きで白衣の女性は唇をなめた。

急に気温が下がったような寒気を感じて、思わずズサツと後ずさったアイルネを見て、クスクスと楽しそうに笑う。

口元に手を当てて無邪気そうに笑うその姿は、同性のアイルネが見ても酷く魅力的で、笑い声にまで人を誘う香りが付いているようだった。

「あ、ア、ありがとうございます！」

声を裏返しながら、発条仕掛けのように腰を折ると、アイルネは慌ててゲストルームを飛び出した。

内側から激しくノックをされているような胸を押さえて、ぜえぜえ言いながら後ろでに扉を閉める。

直ぐ様飛び出してきたばかりの部屋から、扉越しの黄色い声が聞こえて来た。

「……可愛い………!!!!!!」

………何でもいいのか。

紅潮した顔がその声を聞いてますます熱くなる。

ふと横を見ると、案内役の若い兵士がそこに立っていた。

何事が起こったのか理解出来ない様子の表情で、アイルネの方を呆然と見つめている。

「あ……はは」

さすがに気まずくて、それを誤魔化すようにこりと微笑んだ。

実際は「に、kこ……り」くらいきこちない笑顔だったが、彼は一

瞬ビクリと身をすくませる。

みるみるうちに顔が赤くなり、そうして、屹立した姿そのまま
後ろにぶっ倒れた。

ガシャーンと石床に鎧がぶつかると大きな音を聞きながら、ちよっ
とだけ泣きたくなるアイルネだった。

第十一話 アイルネ、ちょっとだけ泣きたくなる（後書き）

短めですけど… Part 2

Part 3が無いよう頑張ります。

第十二話

一時間前。

「あなた達、やれば出来るじゃないですか！」

片付けられたゲストルームを見て、教育係は満足気な声を上げた。あちこちで「疲れたー」とか「まじだるーい」とか「もー無理ー」とか愚痴っているサキュバスがごろごろ落ちてる気がするが、代わりにそこには塵一つ見当たらなかった。

視線を窓辺に移せば、ベッドメイクまでが完璧に行われている。

「お褒めに預かり光栄ですわ」

まるで別人のような部屋の中をぐるりと見回して、教育係はうんうんと頷く。

「よろしい。では、この調子で他のお部屋も……」

「そんなことより！」

教育係の言葉を制して、彼に応じていた白衣を着たサキュバスが言葉を挟んだ。

そのままツカツカと歩み寄り、ゆつたりと髪を掻き上げる。

「なんですか？」

そんな仕草にも一切動揺した様子もなく、教育係はきょとんと問い返した。

「この部屋を使われる方、人間のメイドさんはもうすぐ到着されるのですよね？」

「はあ、まあ……あ、いえ」

言いかけて、教育係はコホンと咳払いをする。

不明瞭な言い方が自分で気に入らなかった。

「はい、もうすぐこちらに来られます」

そう聞いた途端、白衣のサキュバスは表情を華やかせ、パンと手を打った。

「それは良かったですわ。では、その方のお支度を是非私たちにお

任せ願えませんか？」

「お支度、ですか？」

「ええ。長い道のりではないとは言え、旅の間お召し物もきつと汚れていらつしやるでしょう？ そのような格好のまま魔王陛下にお会いいただくなんて、その方は勿論、陛下に対してもご無礼ですわ」
「なるほど、確かに」

考えが至らなかった。

顎に手を当て真剣に考え込む教育係。

「ですから、私たちがお支度をお手伝いしてその方を”綺麗”にして差し上げますわ」

顎に手を当てたまま、教育係はもう一度部屋の中を見回した。

部屋の中は満足なレベルで片付けられている。

そして、気だるそうにダラダラ転がっているサキュバス達。

彼女たちが、この後もこのこと同じように他の部屋の掃除をこなせるかは甚だ疑問だった。

ふむ、と頷き、伺うように白衣のサキュバスを見る。

この部屋のご褒美、と、言う訳ではないが、このまま先の作業に不安を抱えるよりは、彼女たちの望む仕事をさせる方がいくらかマシ……な気がした。

今の状況で空いた手を余らせるのも勿体無い……気もする。

「……綺麗に？」

「はい、綺麗に」

確かめるような声に邪気のない笑みが返ってくる。

教育係はふつと息を吐いた。

「……わかりました。ではお任せします」

「ありがとうございます」

「ですが、やるからにはちゃんとお願いしますよ」

「はい」

第十二話 （後書き）

タイトルが携帯で表示されるか少し不安。

第十三話 わがままな疑問

——今。

玉座の間では、ドレスアップしたアイルネを前に、怒りに戦慄く教育係の姿があった。

額に禍々しいほど巨大な血管を浮き上がらせ、わなわなと拳を震わせている。

コフウと口から瘴気を吐き出しながら、何故か、顎まで出てきている。

（……あの夢魔共……！）

胸中で毒づいた教育係は、もう一度あの時のやりとりを自分なりの解釈で思い返した。

「……綺麗に？（クリーニング的な意味で）」

「はい、綺麗に（コーデイネイト的な意味で）」

「……わかりました。ではお任せします（気がついてない）」

「ありがとうございます（確信的に気がついてないふり）」

「ですが、やるからにはちゃんとお願いしますよ（ちよつと疑わしくなった）」

「はい（偽笑顔）」

邪推だったが、限りなく真実に近い邪推のような気がする。

着飾らせたこと自体は、別に悪いことでもなんでもない。

サキユバス達が、やってきた人間にドレスを着せようが、ステテコ履かせようが、ハゲヅラ被せようが、それは大した問題ではない。……いや、やっぱりちよつとは問題だが、焦点はそこではなかった。

（問題は、彼女たちが陛下の名を使って私を謀っていたということですよ）

序列も厳密には定まってはおらず、縦意識も薄い魔族とは言え、彼は魔王城の教育係である。

歴代の魔王達を、時に親代わりに、時に良き友として、導き、立派に育て上げてきたのだ。

魔族の歴史の傍にはいつも彼の姿があり、そんな彼を名だたる將軍達も一目おいている。

それを、ただか、五、六十年生きただけの小娘達に、良いように操られてしまった。

彼の精神構造は、序列——ひいては魔王陛下を軽んじるサキユバスたちは勿論として、そんな自分がなにより許せなかった。

ただ、これが個人的な感情であることも自覚はしている。

（まあ、彼女たちは大説教（当社比四倍）決定として……）

だから、教育係は一度深い深い深呼吸をする。

激しい感情が他所を向いたため、この場は却って落ち着いてきた。しゃくれかけていた顎も元に戻りつつある。

眉間を数回揉んだ後、つと顔を上げた。

（それにしても、これがメイド……ですか）

目の前で跪く少女を眺めやる。

（……なんというか、思っていたよりも、随分とちんまりとしていますね）

そう心中でごちながら、教育係は完全に引込んだ顎に手を当てる。

彼の視界に居る少女は、事前に読み漁っておいた文献に出てきた人間とは印象を大きく異こととしていた。

幾つかの文献に紹介された人間は、どれも二メートルを軽く超える巨体を持つ者ばかりで、魔族の子供の体くらい太い腕を持ち、筋骨隆々のたくましい体つきをしていて、性格は凶悪にして凶暴、武器の扱いに長け、風呂にも入らず、なにより男だった。

（……………男？）

なにか自分の行いに致命的なミスを感じ取って、途端にテンパリかけるが、教育係は慌てて首を振った。

（い、いえ、何も問題ありません！ 落ち着きなさい！ ……えー

と、これは……そう！ 変身前です！）

やけに小さく見えるメイドの姿を、教育係はそう結論づけた。

魔族の中には、普段の姿から何度か変身が可能なもの達がいる。

詳しくは、魔力が強すぎたり、日常生活に不向きな姿の者などが、自らの拘束や擬態を解くと言う意味だが、大きな違いはない。

実際、先々代の魔王などがそうで、彼は六段階までの変身が可能だった。

かの魔王が真の姿を現した時、それがこの世界の終る時、とまで言われていたほどだ。

にもかかわらず、彼はお風呂が熱すぎるとか夕飯のメニューが気に入らないとかで、結構簡単に四段階くらいまでいった。

当時の教育係の精神の消耗具合は筆舌に尽くし難いものがあつた。ただ、そんな彼も”湯あたりの乱”や”プリン平定”などを経て、今では随一の賢王として歴史に名を残している。

そんな話は脇に置いておくとして、教育係は目を細くして初めて目にするメイドを観察する。

じーっとしばらく見つめた後、少女が居心地悪そうにモジモジしだした辺りで、

（……………変身するんですか？ これ？）

酷くわがままな疑問をおぼえた。

第十三話 わがままな疑問（後書き）

書ける時はスルっ書けるんですよね…。

本日bgmはDo As Infinityの『空想旅団』でござい
ました。
懐かしい。

第十四話 例外なく長い話

「うにゃゝゝゝゝゝゝ！！
いらっしやゝゝゝゝい！！」

突然、両手をバンザイするように上げながら、魔王陛下が歓喜の叫びを上げた。

「どうやら、教育係が顎を出したり引っ込めたりしている間に、我慢の糸が切れてしまったらしい。」

へ？　　つと戸惑いの声を上げる教育係を置き去りにして、玉座からぴょんと飛び降りると、驚きから声もないアイルネの方へと駆け寄っていった。

動けない彼女の前で、ピタッと急停止する。

顔を上げ目が合うと、ふにやつと蕩けるように相好を崩した。

「あのね、来てくれて、ありがと」

一語一語を大切そうにそう言って、ニコニコしながら右手を差し出す。

「にや、名前おしえて？」

しばらく意味がわからず戸惑っていたアイルネだったが、ようやくそれが握手の形をしていることに気が付き、自分も慌てて右手を差し伸ばした。

「あ、アイルネでござい……」

「ございますと言い切れない内、ヒステリックな悲鳴が上がった。

[illegible]

甲高い声で語尾を飲み込みながら……おかげで、旅芸人のような自己紹介になってしまった。

[illegible]

見ると、事態に気がついた教育係が、両手で頬を抑えながら青い顔で叫んでいた。

せっかく取り戻した落ち着きを投げっぱなしジャーマンし、恐慌を来したような状態のままズバツと飛び上がる。

均整のとれた縦に長い体が高い天井すれすれに弧を描き、両手をついて魔王陛下の真後ろに着地した。

「にゃっ？」

片手を伸ばし、むんずと魔王陛下の襟首を掴む教育係。

と、思っやいなや、あろうことが、そのままブンと後ろに放り投げた。

「あ~~~~~に”やあ~~~~~”」

気の抜けるような悲鳴を上げて飛んでいく魔王陛下を見て、慌てて着地点に集合する兵士たち。

なんとかその小さな体をキャッチすることに成功すると、その内の一人が叫んだ。

「きよ、教育係殿がご乱心なされた！ 槍を持て！」

初手が、突く。

不敬罪に問われても仕方がない行いとは言え、さすがのバイオレンスだ。

広間の中をドタバタと混乱が走りまわる中、その騒がしさに相反するような静かな中心で、アイルネはパニックとかそういう段階をはるかに飛び越えた心持ちでいた。

（……わ、訳が、わからない）

ものすごいスピードで、前にも後ろにも進まない車輪が全力で回っているような、この状況は一体なんなんだろう。

スツと教育係が立ち上がった。

釣られてアイルネが顔を上げると、目があった。

ここに来る前、半裸の魔族と向かい合った時よりも、さらに近い距離。

吐息の成分が知れそうなほど接近した距離で、董色の瞳と視線を交わす。

モノクルの奥から覗く理知的なそれが、その瞬間、じわっと涙目になった。

「……………は？」

動揺、とか、近い、とか、美形、とか、緊張、とか、男の人、とか。

そんなアイルネのあらゆる心のキーワードを置いてきぼりにして、教育係がへなへなとその場に尻餅をついた。

「……お……お助けええ……」

蚊の鳴くような、情けない声の花びらのような唇から漏れでる。

腰が抜けたように、というか実際抜けたのだろっ、教育係は両手を必死で動かして、足を引きずりながらゆっくりアイルネから離れていく。

「うにゃあああ」

ぐるぐる目を回しつつ、魔王陛下がふらつく体を立ち上がらせた。

「も……なに……」

左右を兵士に支えられながら、教育係に向かって不満をたれる。

「あ……も、申し訳ございません。こ、この人間から陛下をお救いしようと思い……」

へたりこんだまま応える教育係に、今突くか、今突くか、と槍を構えていた兵士たちの動きが止まった。

あ、そうだったの？ え？ え？ 何？ で、突けるの？ 突けないの？ どっち？ 突いとく？ イチバチで。

ぼそぼそと囁きあう兵士たちにチラリと視線をやってから、再び教育係に目を向ける。

「……なんで？」

珍しく、ちよつと怒ったように。

「で、ですから、その、バイキンとかいっぱい付いてるかも知れませんし、そ、それに、下々の者に軽々しく触れられては陛下の威厳が……その」

段々語尾を頼りなくしながら、ちらつと魔王の様子を伺う。

「……………」

無言で睨んでくる主に、教育係は唇をかねて瞑目した。

さすがに誤魔化されてくれない。

しばらく何かを迷っているような沈黙が続き、やがて、ゆつくりと、目を開いた。

諦めではなく、決意の光をたたえて。

「……陛下、私、実は陛下にまだ申し上げていない秘密がございます」

教育係のその言葉に、魔王が頷いた。

「うん」

その表情が少しだけ優しくなる。

「その秘密とは……そ、その、ですね、実は、わ、私、じ、実は私は……その、に、人間が怖うつちよつと苦手なのでございます！！」

ぴしゃーん！　ごろごろごろ……。　

教育係が言い放った瞬間、大きな音を鳴り響かせながら稲光が走っていった。

城の近くに落ちたのか、秘密を告白した悲壮な表情に、薄い陰影が出来る。

そんな晴天の霹靂とは逆に。

「……」

その場にいたほぼ全員の胸に去来する　え、いまさら？　の五文字。

一目見て本気だとわかる落ち込みようで、教育係は押し黙っていた。

一番無いと思っていた答に、突く気まんまんだった槍先がとたんに萎えていく。

「えつと、ちよつとだけ気がついてたかにや？」

こんなに困っている魔王陛下を初めて見た。

後に、この場にいわせた兵士が語っている。

頬を掻きながらそう言う魔王に、教育係は驚いたように目を見開いた。

「やはり、陛下は気づかれていたのですね……」

「うにゃ〜……みんな気がつい……」

「私が幼少の砌……そうあれはとても暑い夏の日のごでございまして」

なんだか語りだしちゃった教育係に、黙って槍を下ろす兵士たち。
「はにゃ〜……」

仕方なく聞く態勢に入る一同の中、魔王陛下だけが小さくため息をこぼした。

彼の話が、例外なく長くなることを知っていたからだ。

第十四話 例外なく長い話（後書き）

アイルネと魔王たちとの絡みを全然考えてなかったです。
不思議と。……いや、ホントに不思議。

第十五話 単純な楽しみ

木立の中を風は走っていた。

葉叢を枝ごとしならせ、高く低く。

右に左に。

疾く、疾く。

やがて、風は森を抜けて、開けた場所へと出た。

そこには小さな湖があり、岸には栈橋とボートがあつた。

森から続く道は、狭く二股に分かれ、片方はそちらへ、もう片方は湖の畔に建つ屋敷へと続いている。

ちようどその分岐路で、風は進路上に立っていた何かにぶつかった。

衝撃で幾筋かに分かれた。

——ビュオオオオオウ……。

抗議するように一鳴きして風は去っていった。

湖に、対岸に向けて波頭が立っていく。

そんな様子を見送り、分岐路に立っていた老齡の魔族の男は、口唇に微笑を浮かべた。

歩みを再開し、屋敷の方へと分かれ道を曲がる。

鎧を纏った巨大な体を揺らしながら、屋敷の玄関前へ立った。

躊躇うことなく大木のような腕で扉を開き、中へと入る。

白髪と皺の深い顔を乗せた太い首を巡らせ、家内に変わりがない事を悟ると、すうすうと体が膨らむほど息を吸い込んだ。

「帰ったぞォー！」

建物全体が震えるような大声でそう言って、男は耳を澄ませた。少しの後、階上からバタバタと慌てる足音が聞こえてきて、ひよっこりと小さな体が踊り場に現れた。

「お祖父様！」

嬉しそうに顔を輝かせた少年は、逸る気持ちを慎重に抑えるよう

な足取りで、階段を降りてくる。

一段一段足元を見ながら。

そんな様子を見て、老魔族はつと視線を上げた。

少年は最後の一段を飛び降りると、老魔族の足元へと駆け寄って来た。

「おかえりなさい！ お祖父様！」

「……ふむ、これは不思議な。声はすれど姿が見えん……」

白い眉の上でわざとらしく手で庇を作り、あたりをきよろきよろと見回す。

「こちら、こちらでございます！ お祖父様！」

両手を広げて、足元で必死にぴょんぴょん飛び跳ねる小さな体。

跳ねるたびに真珠色のおかっぱ頭が小さく広がる。

それ以上やると、あ、これ泣くね。 と言う絶妙のタイミングで、老魔族は”目ざとく”少年を見つけた。

「おおお！ こんな所におったか！」

「はい！ こんな所におりました！」

視線を下げると若干涙目のほつとしたような表情に出会った。ほんの少し手遅れだったらしい。

それにしても、出掛ける度に毎回やってるネタなのに、こうして毎回きつちり騙されてくれるのはどうなのだろう。

ちよつとばかり将来が心配にならないではないが、そんな所も含めて愛おしかったりするものだから、”お祖父ちゃん”というのは救い難い存在らしい。

そんな風に思いながら、老魔族は大きな手で少年の滲んだ目尻を拭ってやった。

黙ってされるがままになっている小さな体を両脇から抱え上げる。

「どれ、わしの小さなお星様の顔をよく見せてくれ」

「はい！」

良い返事をして、少年はゆるんだ表情をおすまし顔に引き締めた。そうすると、董色の瞳が賢者のような理性的な光を宿す。

「ほう、相変わらず、良い男ぶりだ！」

「きゃーー」

そのままぐるぐると体を回転させると、少年は途端に表情を崩して嬉しそうな悲鳴を上げた。

「ほれスピードアップだ」

「うきゃーー」

そう言って回転の速度を早める。

常軌を逸した高速回転に床が悲鳴をあげだした時、あまりの回転の速さに円筒状に見え始めた二人に声がかかった。

「ふふ……その辺りになさってください。興奮して夜眠れなくなっていますわ」

「お母様！」

声の主は少年の母親だった。

少年とよく似た面立ちと、真珠色の長い髪。

瞳の色だけは似ず、只今の空のような深い蒼色をしている。

階段の下で柔和に笑うその姿を確認して、老魔族は回転を止めて少年を解放してやる。

「お母様！ お祖父様が帰って来られました！」

「ええ、そうね」

まるで、台風にでもあったかのように、おでこ丸出しのボサボサ頭で駆け寄ってきた少年の髪を直してやって母親は老魔族に向き直った。

「おかえりなさいお義父様」

「うむ。わしの留守中なにか変りなかったか？」

「はい。お義父様こそご無事で何よりでした」

「人間相手にそうそう遅れはとらん。ちょっと撫でてやったら途端に逃げていきおったわ」

「まあ」

口元を手で隠しながら、母親は微笑んだ。

「お祖父様、お祖父様」

ついついと手を引かれて、老魔族は視線を下げる。

「お祖父様は人間と闘ってこられたのですよね」

「むり」

頷くと、尊敬のまなざしを向けてくる小さな体を抱き上げてやる。

「人間とはどのような生き物なのですか？」

「そうさな」

顎髭を撫でつつ、腕の中に居る少年を見る。

無邪気な瞳の中に、好奇心の萌芽のような煌きがあった。

「まず人間には四十八対の太い牙が生えておる」

「ええええええええええ！」

全然想像と違ったのだらう、その顔いっぱいに驚きが満たされる。

「その牙で、魔族の子供など骨ごとバリバリ食ってしまうのだ」

「ひう、ひい……」

怯える少年に老魔族はわざと生真面目な顔を向ける

「厄介なのはその再生力よ。何度たたき折つてやろうとその度に生えてきおる」

「そ、それでは」

震えるような声で少年は続ける。

「まるで鮫ではありませんか」

「鮫も食うぞ」

ひい
い
い
い
い
い

目をつむり、聞きたくないというように顔を背けた。

「お、お茶の準備をしてきますわね」

「うむ」

ふるふると肩を震わせながら、母親がキッチンの方へと消えて行く。

時折くつくつとうめき声のような音をさせるその背中を見送る。

「それに、人間はあまり湯浴みをしない」

「はえ？」

「人間のこんな歌がある。月曜日にお風呂を炊いて、火曜日にお風

呂に入る」

「え！　なぜ、なぜ月曜日にお風呂に入らないのですか！？」

思いの外食いついてきたが、老魔族は首をかしげて見せる。

「さてな。人間の考えることなどわしには分からね」

「おおお恐ろしゅうございます」

何故かガタガタと震えながらも、少年は顔を上げた。

「で、でも、お祖父様はそんな人間をやっつけてこられたのですよね！」

「……楽勝だな」

ニツカと笑ってみせると、心底ほつとしたような顔になった。

喜色を浮かばせ小さく跳ねながら、体からも力が抜けたのがわかる。

「やっぱりお祖父様は凄いのです！」

鼻息荒く興奮する少年に、老魔族は酷く優しい笑みを浮かべた。

「凄いだろう。だから、一人でこの森を出てはならんぞ。外にはそんな人間がわんさとおるからね。出るときは必ずわしと一緒にだ」

「はい」

ももも、もちろんですよ、そんなの真つ平御免です、と言わんばかりにくくく頷く。

そんな様子を見て、老魔族は大きな手でその頭を撫でてやる。

「……お主に孫が出来る頃には、こんな風に語らずに済む世の中が来とればいいな」

「はい？　なんですか？」

不思議そうに見上げる表情に、なんでもないと答えてやる。

——それまでは、怯えてくるくらいがちょうどいい。

そうなのですか。と素直に納得する少年を見て、老魔族はそんなふうにいるのだった。

「あ、それからな。人は機嫌がいいと鼻から火を噴く」

「き、機嫌が良いのになぜ！？　そ、それではまるで竜ではありませんか！」

第十五話 単純な楽しみ（後書き）

いつも読んでいただいております。

もうちょっと続きますので出来れば最後までお付き合い下さいませませ。

それでは！。

第十六話 大成功

す、少しだけ変わってるかなあ？……と、アイルネは思ったと思っただ、それは長年のメイド経験が無意識にさせた婉曲的な表現である。

実際は大分変わっていたし、その思いは殆ど確信の域に達している。

膝を屈して語る長身美形の男。

種族、権力、ルックス——思い当たる先天後天的有利をその身に備えた男が、人間が怖いと言って何故か訥々と祖父との思い出を語っていた。

至近にいれば目のやり場に困るような存在だが、少し距離を置いたくらいでこんなにも残念な感じになってしまふとは。

投げ飛ばされて距離の出来た魔王陛下などは、既に立ったままふととと微睡みに身を任せるに至っている。

隣にいる兵士が気を使って「ほら、聞いてあげないと駄目ですよ、陛下。教育係殿一生懸命喋ってるんですから」と体を揺すっているがあまり効果はないようだ。

アイルネがそちらにばかり気を取られているうちに、いつの間にか声は止まっていた。

何かが極まったのか、ズズ〜と鼻を吸る音が聞こえ、教育係はいつそ晴れ晴れしいほどの表情で顔を上げた。

秘密を打ち明けたことで、大分すっきりしてしまっただけらしい。

「……と、いうわけなのです」

「あ、ほら陛下、陛下ってば。終わったみたいですよ」

「うにゃ……」

器用に小声で叫ぶ兵士に揺り起こされ、やっと魔王陛下は瞼を上げた。

眠そうな半眼を手でこすりながら、くあつと小さく欠伸を噛み殺

す。

「うにゅ……そういうことなら仕方がないにゅ」

精神のうち半分以上を夢の世界に置いてきてしまっている魔王陛下が、ね、それ絶対何のことかわかってないでしょ、と言う口調で言った。

しかし、ある種の興奮状態にある教育係はその事に気がつかない。ずびつと鼻から出てきた残念をハンカチで拭い、立ち上がる。

そうして、長い足の威力を存分に発揮して、いつもの定位置へと戻っていく。

その際、四分の三睡眠状態の魔王陛下の襟首を掴んで、玉座に据えておくことも忘れない。

それを見て、ワタワタと兵士たちが持ち場へ帰っていく。

教育係は手のひらに”魔”と三回書いて、打って変わった毅然とした態度でアイルネの方へ向き直ってきた。

「人間のメイドアイルネ。この度は良く来て下さいました。私は当魔王城の教育係です」

声にもどこか自信を取り戻した教育係が、殊更に見下ろすような態度でそう言ってくる。

「そして、こちらにおわすのが、あまねく魔族を束ねられる魔王陛下であらせられます」

ようやく雰囲気がそれらしくなって来たことに内心でほっとしながら、アイルネも礼をする。

「アイルネでございます。この度はお声がけありがとうございます」
「っ……いえ」

一瞬ビクつと体を強ばらせる教育係。

「ん……こほん。それでは早速仕事の話させていただきます。道中説明を受けたかも知れませんが、もう一度詳しく説明させてもらいますと……先日、人間の新聞に勇者さん達がもうすぐ魔王城を訪れると記事が出ました。記事の内容は不届きなものだったのですが、そこはそれ、お客様を迎えるのに何も準備をしていないというのは

当魔王城の名折れ。そこで貴女をお迎えしたというわけです」

混乱を当たり散らすことで冷静さを取り戻した魔族の教育係は続ける。

「貴女にやつてもらいたいのは当魔王城の大掃除と勇者さんを迎えるに当たつての準備。その指揮をとっていただきたいのです」

「指揮ですか？」

「はい。恥ずかしながら、我々にはそれらの詳しいノウハウが無いのです。が、人手だけは腐るほどあります。実際腐ってるのもいますし」

……それは別に会いたくないけど。

本音を隠してアイルネは黙って続きを促す。

「当魔王城の規模を考えると、とても一人で仕事をこなすのは不可能。そこで貴女には我々魔族を指揮してもらい今回の『勇者魔王城攻略戦！』の舞台を整えていただきたいと思っています」

半裸の魔族から話を聞いたのより、少しばかりやるべきことが増えていく。

しかし、主人に恥をかかせない様に、お客様を迎えるのも紛れもないメイドの本分の一つである。

勇者が、魔王城にとって本当にお客様にあたるのかどうかは疑問に思ったが、それはこの際問題ではない。

「わかりました。勇者様をお迎えする準備、微力ながらお手伝いさせていただきます」

首肯したアイルネに、あからさまに教育係はほっとしてみせた。

これは、依頼を受けてもらえたことよりも、無事に人間と話終えたことへの安堵が強いだろう。

「よかった。では時間も無いことですし、早速取り掛かってもらいます。あ、それから、一人貴女の面倒をみる者を付けますので、何か必要なものなどがあればその者に申し付けなさい」

……メイド、の面倒を見る者？

アイルネの疑問を読み取ったのか、教育係が付け加える。

「これは護衛を兼ねています。なんと云いますか、魔族の中には恐れ多くも魔王陛下の意に反する者おりますので」

言いにくそうにする教育係に、ああ、と合点がいく。

というよりも、問題はこちらにあるのだろう。

(……私が人間だから)

アイルネの感覚では、その事自体に反発する魔族がいたとしても何もおかしい事はない。

むしろ、今まで会ってきた魔族の方が、常識的には異端だった。

「カイル！ カイル・ラウダー！」

教育係が人物らしき名前を呼ばれる。

「ここに――」

扉が開くのと、返答があるのがほぼ同時だった。

広間の入り口から騎士服に身を包んだ男が入ってくる。

(―― あっ！)

なんととはなしに振りかえって、アイルネは思わず上げそうになった声を封じ込めた。

そんなアイルネを無視するように、素知らぬ顔で男は歩いて来る。柔和な笑顔を讃えて、口をパクパクさせるアイルネの前を通り過ぎた。

白い翼を畳みながら、男は教育係の目の前で跪いた。

「貴方に、この者の滞在中の護衛と世話を命じます。差し当たっては魔王城の案内をしなさい」

「案内？……するー……案内一緒にするー……」

四分の四睡眠陛下が、開いてもいない目をこすりながら言う。

「ダメです。これから陛下は人間についてのお勉強の時間です」

「……に”や”……」

不満そうな声も直ぐに寝息に飲み込まれていく。

教育係は男に向き直る。

「謹んで拝命いたします」

そんなやり取りにも慣れた様子で、敬々しく頭を垂れる。

「よろしい。さ、陛下お勉強の時間ですよ」

「にゃ~~~~~」

間延びした悲鳴を上げながら、教育係に襟首を掴まれて奥へと引っ込んでいく魔王陛下。

二人の背中が完全に見えなくなるまで見送って、魔族の男は振り返った。

「……服、着てる……」

呆然とつぶやくアイルネに笑顔を返す。

「さ、では参りましょうか、”嬢ちゃん”」

イタズラが成功した笑顔を浮かべて、魔族の男——カイル・ラウダーは優雅に一礼をする。

第十六話 大成功（後書き）

ずっと考えてたものの、名前が思い浮かばず。
結局ハリウッドの俳優さんの名前をつけましたw

本日のbgmはASIAN KUNG-FU GENERATION
Nの『君という花』でございました。

第十七話 大人びた理性は静かに沈黙する

「デーモンのクオヴレー。このキッチンの責任者」

「ぶわははははは！ 吾輩は十万四十二歳である！」

「……………」

初対面の顔面蒼白魔族に、開口一番の長生き自慢。

事実なら超高齢の魔族の前に、自分も年齢を教えるべきなのかしら、と、頭を悩ませるはめになった。

グダグダの謁見を終えたアイルネは、教育係の言葉通りに、カイルの案内で城内を見てまわることにした。

一旦宛てがわれた部屋まで戻り、動きにくいドレスから普段のメイド服に着替えた上で、そのまま上階から見て回る。

そうして、中天にあった太陽の角度を下方に八度ほど消費した結果、分かったことが幾つか。

三階——動く床フロア（没——故障により動作不可）

二階——とび出す槍フロア（没——慢性的槍不足【参照：十四話】

）

一階——毒の泉エリア（没——経年による浄化【親子連れ憩いスポットに】）

etc etc …。

というわけで、勇者一行からしたら万々歳、魔王城としては、うーん、な現状を目の当たりにして、アイルネは軽く考え込んだ。

（………… 仕掛けに故障の見られるフロアからお掃除を始めて、なるべく早く罫を修理してもらわなくちゃ…………）

死のアクティビティを前に、この冷静さ。

彼女は、働き者だった。

そこに、疑う余地はない。

ただ、良い人間か、と問われれば、彼女は首を横に振る。

アイルネ本人は、自分を良い人間などと思ったことは一度もなく、むしろ、そうでないからこそ、その分人よりいっぱい働かなければという思いがある。

労働に真摯に望むのは当然のことで、それと人格とは全く関係ないものなのである。

と、そう、彼女は無意識の内に割りきっていた。

だから、彼女の仕事に対する姿勢は、情熱はあるものの、どこかしら乾いた視線をしている。

アイルネは勇者一行の事を心から応援している。

しながら同時に、彼らを畏にはめるための装置を修復する為の^{スケジュー}算を、どこまでも精密に立てようとする。

彼女にとってここに一切の矛盾はない。

理性と感情、仕事には前者が重要で、彼女の理性は非常に大人びていた。

クオヴレー（推定四十二歳）に別れを告げた二人の足は、中庭を囲むアーケードの石床を踏んでいた。

建物に囲まれた口型の中庭で、四角く広めに切り取られた空は既に変色を始めている。

仰いだ赤色に視線を残しつつ、アイルネは隣を歩くカイルに問いかけた。

「少し不思議に思っていた事を伺ってもよろしいですか？」

軽く頷くカイルを見て、では、と口を開いた。

「どうしてお名前で紹介される方とそうでない方が居らっしゃるんですか？」

実は魔王陛下に謁見した時から思っていた疑問だった。

ああ、と頷いてカイルは答える。

「そもそも、種族ごとに精神的繋がりの強い魔族にとって個人名は重要じゃない。魔王城^{マジック}に居る限りはそれぞれ役割があるしな。名前がある奴らは、みんな人間に混じって暮らしたことのある奴らだけだ」

「では、カイルさんも？」

「そう。さっきのクオヴレーなんかは人間の街の食堂で働いてたし、他にも人間の街で暮らしてた奴は結構いる。ああ、ほらあいつ」

そう言っただけカイルが向かいのアーケードの中を指差した。

少し距離があるため詳細は分からないが、どうやらそこにいる男性を指しているようだ。

「あの方もですか？」

「アレックスっていう。今度来る勇者の元仲間の一人だ」

「ええっ?!」

「元々、この辺に住んでたやつなんだが、子供の頃に遊びに行った戦場跡で、たまたま通りかかった人間の商人夫婦に孤児と間違われたらしい。その人間がまたイヤツらだったらしくて、そのまま捨てられて自分の子供同然に育てられたみたいだ」

「な、なんだかのんびりしたお話ですね……」

もう一度、中庭の向こう側にアイルネは目を向けた。

中肉中背と言う以外、やはり詳しい所は分からないが、言われて見れば、何となく人間に近い雰囲気を感じているような気がしないでもない。

「そのあと、夫婦の住んでた街から勇者が選ばれて、幼馴染だったあいつもココノコ付いて行ったんだと」

本当にココノコだ。

「そ、それで？」

「そっからは俺も詳しく知らねーけど、最近一人でひょっこり戻ってきた。……ま、電撃移籍ってやつだな」

「電撃移籍……」

本当か？ 本当に、それが一番ふさわしい表現なのか？

何か釈然としないものを感じながらも、アイルネは大人びた理性で静かに黙っておくのだった。

第十七話 大人びた理性は静かに沈黙する（後書き）

引き続き十八話をお楽しみ下さい。

第十八話　ようやく話は冒頭へ戻る……　ようやく

人気のなくなった中庭——アーケードを支える柱の一つ。

ちようど城内への出入口を眺める位置にある柱の陰で、更に深い影が夕闇に紛れて蠢いた。

夜に近い世界に、人の形をとって一歩進み出る。

「やだ、本当に人間に頼る気なのね」

弦月のように細められた口元が開いた。

金色の瞳を二人の消えた出入口に向けながら、返答を期待しない独り言のようにつぶやく。

闇を佩いて現れたのは、炎のように赤い髪をした長身細身の男だった。

軽薄そうな表情の半分を隠す長く伸ばされた前髪をかき上げると、尖った左耳にされた髑髏のピアスが顕になる。

「ちよつと、彼ら本気みたいよ？」

妙な裏声で喋る男に、左耳にされたピアスが反応した。

カッと目の部分が光ったかと思うと、下顎がカタカタと音を立て始める。

『聞こえてる……感度はどうだ？』

ピアスから低い声が発せられた。

その声に突然身悶え始める男。

「えっ、あつ、やだ、もう！　何考えてんの？　だめよ、いくら陽が落ちたからってそんな質問……」

『馬鹿、ピアスの事だ馬鹿。とんだ馬鹿。オカマ、馬鹿』

「ちよつと、オカマ挟んで馬鹿っていうのやめて！　それに、あたしは性を超越した魔族なの。そんな通り一遍な呼び方やめてくれない？」

『わかった。……オカマ魔族』

「えっ、何その最低のハイブリット。……　ったく、感度は良いわよ」

『当然だな』

自信満々の声に、はいはいと返事をしながら、男は髑髏型のピアスを指で弄んだ。

「でも確かに凄いわね、これ。距離や障害物に関係なく離れた相手と会話ができるんですよ。ノイズも入らず音もとってもクリアだし」
『当たり前だ。誰が作ったと思ってる』

「……くっ、本当に自信過剰なんだから」

半ば呆れつつ返答すると、急に男は頬を染めながら、お腹の前で手を組んでモジモジと体を左右し始めた。

「ま、まあ？　そ、そういう自信たっぷりな所も、す……す、き、だつたり？」

『ガー……ザザー……ガガー』

「——あれ？　混線？」

突然、不自然に調子が悪くなるピアス。

『すまん。急に電波が入らなくなった』

電波？

「もう！　折角人が愛の告白かましたっていうのに」

『はは、ちよつと何言ってつか分かんないです』

「わかるでしょ、てかなんで敬語なのよ！　……はあ、もうイイわで、どうするのよこれから」

がっくり来ながらも、話をもとに戻す。

『しばらくは直接手出し無用だ』

「ほつとくつて事？」

『いや、ただの人間がノコノコ魔王城にいくとは思えん。何か訳があるはずだ。お前はそれを探れ』

「あの娘を調べるのね」

『徹底的にな』

「りょ……かい」

肩を落としていた男が顔を上げる。

「はゝ、ごめんねゝ。これも真実の愛のためなの。覚悟しといてね、

子猫ちゃん^{スイト}」

明かりの灯りはじめた魔王城を見上げ、パチリと小さくウインクした。

「……っ」

ゾクリと悪寒を感じてアイルネは振り返った。

「どうした？」

隣を歩いていたカイルが怪訝そうに聞いてくる。

「あ、いえ、今とてつもない呼ばれ方をされた気がして……」
やけに具体的な悪寒だった。

「大丈夫か？」

「ええ。多分、気のせいですから……」

そう言いつつ、振り返った背後に視線を残してしまう。

通ってきた廊下に無数に灯された燭台は明るい。その分、余計に深い影があちこちに不安を落としていた。

「嬢ちゃん」

呼ばれて顔を戻すと、カイルの顔があった。

きょとんとするアイルネに、にっと笑顔を見せる。

「例え何があっても、嬢ちゃんは無事に人間の国に帰すから」

言われた途端、ほっ、と、全身の緊張がほぐれた気がした。

と同時に、体の中のどこかがツキンと痛む気がする。

それを堪えて、アイルネは微笑んで返した。

「ありがとうございます……でも、嬢ちゃんはやめてくださいね」

そう言って先を歩き始めると、頭を掻きながらカイルがついてくる。

「……あ、そうだ忘れてた」

タタタつと小気味良い足音響かせて、カイルが目の前に回りこんできた。

足を止め、何事かと首を傾げる。

「魔王城へようこそ、アイルネ」

そのいたずらっ子のような笑みに、アイルネは「はい」と笑顔で返した。

——こうして、ようやく話は冒頭へと戻る。

第十八話 ようやく話は冒頭へ戻る……ようやく（後書き）

いつも拙作を読んでいただいております。中路です。

奇特にも続きをお待ちいただいでくださった、心優しい皆様方、長く時間がかかってしまい、本当に申し訳ありませんでした（土下座）お優しい皆様の事ですので、きっと許してくれることとは思いますが……（チラッ

次の十九話で一章が終わります。

全体を通して二章しかないので、物語的にはもう、すぐ終わります（笑）

出来れば最後までお付き合い下さると嬉しいです（チラッ

そして、もし良ければ感想などご意見いただけたら、とても喜ぶな
〜、と（チラッ）（チラッ

……すみません、チラ見やめます。

それではこのへんで失礼します。

本当にいつもありがとうございます。
では。

第十九話 最悪のニュース

寝返りを打った手に、ふかりと柔らかい感触があつて夢から覚めた。

なめらかな感触のそれは暖かく、丁度人肌くらいの温度といった所。

人肌といえば哺乳瓶か草履と相場が決まっているが（？）、ここには泣き叫ぶ赤子も傳くサルもい^{かしず}やしない。

あるのは重力下とは思えないほどふかふかのベッドに、スベスベ手触りの清潔なシーツ、それに、枕元に散らされた花びらから立つ微かな香気だけ。

それもそうで、ここはアイルネに与えられた居室であつた。

初めてこの部屋を目にした時に見た、二つの立派なベッドは、最初こそ豪華すぎて落ち着かなかつたが、横になつてみるとやはり寝心地は良い。

旅の疲れもあつて、そうなるかとは一直線に転がっていくだけで、彼女はすぐに寝息を立て始めた。

だから、詳しいことは覚えていないのだが、かと言って、こんな乳児用品あつただろうか。

しかも、この哺乳瓶、哺乳瓶にしてはやけに大きく、哺乳瓶のくせに、手で探っていると時折「やん？」と可愛らしい声を上げる。いい加減、そろそろ触つちやいけない部分まで触つちやいような気がして、アイルネは恐る恐る薄目を開けた。

堰き止められていた光がなだれ込んできて、一瞬視界を失う。ゆっくりと戻ってきた色彩の中に、予想通りの光景。

見覚えのあるサキュバスが、ぴつたりと体を押し付けて、添い寝をしていた。……裸で。

「おは（ぶすっ）あーっ！」

頭の「おは」は朝の挨拶で、丸括弧はアイルネがピースサインを

悪用した音。

最後の悲鳴は人差し指と薬指で両目を狙われた結果だ。ピースじやなくてグワシと狙った。

「ど、どうして隣で寝てるんですかっ!？」

顔を手で抑え、肌色多めでのたうち回るサキュバスにがくがく震えながら、慌ててシーツで体の前を隠す。

寝起きドッキリに心拍数を上げつつ、ベッドの上で後退りするアイルネの耳に落ち着き払った声が聞こえてきた。

「特殊な訓練を受けている魔族です。良い子悪い子にかかわらず決して真似しないよーに」

「……何やってるんですか？ カイルさん」

ぴんぽーんと効果音が聞こえてきそうな声の方に顔を向けると、窓際に置かれたテーブルで、モーニングティーを嗜む魔族の姿があった。

純潔の白い羽根を畳み、あさつての方向を向いてカップを持ち上げるさまは、一幅の絵画のようでもある。

「形式美というものがあるだろう。お約束は大事にしないと」

カップを置くと、席を立てベッド脇に近寄ってきた。

もう一方の寝床からシーツを取り上げ、ゴロゴロ転がっているサキュバスにかけてやるカイルに、アイルネは笑顔を向ける。

「そうではなくて……こんな時間に、私の部屋で、何をやっているんですか？ カイルさん」

低空すれすれを飛ぶ氷の礫のような声だった。

カイルはしばらく顎に手を当て考えこむような表情をすると、釣られるようにニコツと笑う。

「朝の散pあーっ!」

——ぴんぽーん。

身体に影響のないグワシを使用しております。良い子悪い子普通の大人にかかわらず決して真似しないで下さい。

……それでも、ベッドで寝れてる内はまだまだ幸せだった。

「終わるかーい！」

絶叫を上げ屍餅をついたアイルネの後ろを、慌ただしくトロルの群れが走る。

緑色の巨体を揺らしながら、肩にはそれぞれ、城内に無秩序に置かれていたオブジェや石像などが担がれている。

「お、お待ちなさい！」

悲鳴のような声を上げて、教育係が後方から駆け込んできた。

もも上げ腕振りが完璧なアスリート走り、回りこんで両手を広げ、トロルの進路を妨害する。

「あなた達！ それは十四代魔王陛下ご就任の記念に作られた『懊悩するスライムの像』ですよ！ それに、そちらは名工ヴァ・ルヴァ・ルジャンの『歯車たるスライムの悲哀』！」

どうしてスライムばかりがモチーフに……というか、スライムは歯車に向いてないと思う。

狂乱する教育係を見て、アイルネは思わずため息を付いた。

五月蠅いし、邪魔な事この上ない。

うがぁ……（訳：親方ぁ……）と困ったようにこちらを見てくるトロル達に一度頷いて、アイルネは立ち上がった。

「さあ、こっちに寄越しなさ……ぎゃー！ 腕が取れた！」

壊れてしまった石像を必死でくっつけようとしている教育係に、アイルネは音もなく近寄っていく。

ぴつたりと背後についた所で、声をかけた。

「教育係様」

「なんです……って、なんです？！」

手で体をかばいながら、ズサッと飛び退る教育係。

思わず放り投げてしまった石像の一部が頭に当たり、とばっちりを食らったトロルがしくしく泣き始める。

「その、な、なんででしょうか？」

明らかに腰が引けた様子で、教育係が問うてきた。

「いえ、実は、ご無礼とは承知の上なのですが、私にもこちらの素晴らしい品々についてお教えいただきたくて。さぞや立派な謂れのあるものですよね」

懊悩するスライムの像を眺めるアイルネの言葉に、一瞬あつけに取られたような顔になる教育係。

が、直ぐにその表情に隠し切れない喜色が浮かぶ。

「そ、そういう事でしたらいくらでもお教えてさしあげますが。そうですね、まずこちらは……」

教育係は完全に油断していた。

普段なら決して油断しない（勝手に）相手のはずなのに、やけにしおらしいアイルネに対して少しばかり気を緩めてしまった。

得意の話題だったこともある。

夢中で話し続ける教育係の方に、忍び足で近寄るアイルネ。

真横に立つと、無造作に手を伸ばし、その頬に手を触れた。

「——がっ……な、な、なにを？」

「申し訳ありません。お顔の色が優れなかったようでしたので……」

手を当てたままニコリとアイルネが微笑んだ途端、ザーッと驟雨しゅううの様な音が辺りに響いた。

教育係の鳥肌が立った音で、全身から嫌な感じの汗も流れ始める。

「良かった、熱はないようですね」

「ひいひいひいひいひいひいひい……！」

とどめの一言だった。

ゴシゴシ頬をこすりながら、涙の尾を引きずって部屋を飛び出していく教育係。

その後ろ姿を見送って、表情を引き締めたアイルネが腰に手を当てた。

「さあ、作業を再開しましょう」

その手際のよさに、周囲を囲む魔族からおおーと歓声が上がった。

中々あくどい手を使った気もするが、徹夜続きの身としては贅沢も言っていない。

「随分アレの扱いが上手くなったな」

「カイルさん」

感心したような声に振り返るとカイルがいた。

蹲ってまだちよつと半泣きのトロルの頭を撫でて送り出し、立ち上がって視線の距離を縮める。

「どうかしたんですか？」

アイルネが尋ねると、カイルはいつものいたずらっ子のような顔で笑った。

それでも若干やつれてはいるが。

「良いニュースと悪いニュースがある。どっちから聞きたい？」

「どっちも聞きたくないです……」

くくくつと苦笑しつつ、じゃあ良いニュースから、と懷から紙片を取り出した。

「注文したエーテル五十本、届いた。はい、これ伝票」

「え、ちよつと、品代と送り料が一緒って、なんですかこれっ？」

受け取った紙片をみて、アイルネが怒りの声を上げる。

「場所が場所だからな。人間がここまで運んでこれただけでも大したもん……」

「悔しい！ 足元見て！」

「あ、これ聞いてないな」

しばらく、ぶんすかやっていたアイルネだったが、ようやく治まってきたのか、深呼吸をして伝票をなおした。

「……わかりました。すみません、それじゃあコレ空っぽの宝箱に五本ずつくらい詰めといて下さい」

「はい」

傍にいた兵士にそう言いつけて、アイルネは視線をカイルの方に戻した。

やや不安げな表情になる。

「それでは、悪いニュースというのは？」

「うん。勇者が村を出発した」

「へ？」

何を言われたか理解できなかった。

ぐわーんぐわーんと視界が回る。

「偵察に出てた部下からの報告だ。勇者が村を出た。早くて五日くらいでこちらに到着するらしい」

どこか生気を取り戻したような顔で、嬉しそうに語るカイル。
気絶しそなくらい、最悪のニュースだった。

第十九話 最悪のニュース（後書き）

やっと自分の中でキャラが固まってきました（今更？）
おかげでちょっと自由をさせてあげられる。

第二十話 決着は魔王城で（前書き）

内容が予定より、長くなってしまいました……。ちょっと冗長……。でも、まあ、もうあんまり出ないやつらだし……。別にいいか！（笑）

勇者パーティの名前の方はご自由にお呼び下さい。

そう！名前はみなさんの心のなかにあ（ry

第二十話 決着は魔王城で

覗き込めば眼下には屹立する山々が見えたが、その場所では基本的には空しか見えなかった。

普段は上空を浮かぶ雲でさえここでは重すぎるらしく、今は足元より遥かに低い位置で呑気に漂っている。

霊峰と崇められる場所。

その頂上に、対峙する六つの人影があった。

その図式は、一対五。

「っ……あんたはっ！」

沈黙を破って、五人の内、サイドテールの少女が叫んだ。

そんな団体があれば、『霊峰を愛でる会』に糾弾されそうなくらいの軽装で、両手にアシメトリの少し変わった形のガントレットが嵌められている。

気の強そうな顔立ちが、今は泣き出す寸前のような表情に歪んでいた。

「どうして、こんな所で私たちの敵になってんのよ！」

少女の責めるような問い掛けにも、男は顔色一つ変えない。

突きつけた剣先を下ろすこともなく、先程から同じ姿勢で五人を睨みつけている。

「……引き返せ」

男の名をアレックスという。

幼い頃、勘違いから人間の夫婦に拾われ、人に育てられた魔族だった。

だけでなく、二週間前まで勇者の仲間をやっていた変わり種である。

「……っ」

「随分と勝手な言い草じゃないですか」

再び激昂しかけた少女を片手で制して、着流し姿の男が前に出る。

表情は優しげで物言いも柔らかいが、その身に漲る殺気は常軌を逸していた。

腰に佩いた太刀に手を掛けながら、かつて仲間だった男に殺人者の目を向ける。

「突然黙って居なくなっただかと思えば、苦労して登った山の上で『引き返せ』……ですか」

「そ、そうですよう」

男の尻馬に乗る様に、五人の最後尾に隠れるようにして立っていた少女が口を挟んだ。

パーティのヒーラーで、元女海賊というこちらも中々異様な職歴をしている。

海賊旗のおなじみのマークが入った眼帯に、小柄な体に合わない巨大なキャプテンハット。

ビキニトップ（貧）にショートパンツと言う、愛でる会が再びザワツとしそうな格好で、袈裟懸けに弾帯を巻きつけている。

腰に提げたカトラスと短銃を揺らしながら、おずおずと前に出てくる。

「い、いきなり居なくなっちゃって心配してたんですよ。け、怪我とかしてないですか？」

「……ああ。心配かけてすまない」

思わず答えてしまったアレックスに、心底ほっとしたようにため息をつく。

「良かったあ……」

「良くないわよ！」

「はう！ す、すすすみません、良くなかったです！ 怪我して下さい、やあ！」

ターーーンと間延びした破裂音が木霊し、着流しの男がドサツと倒れた。

ガントレットの少女の声に驚いて抜きざま放った鉛の弾が、見事に着流しの男の背中を捉えていた。

「……戦いに狂い、戦いに生きた……面白い人生でした……よ」
「はあう！　す、すすすすすみません、間違いました！　あああ」
「がくっ……」ってならないで下さあい！」

凶器の銃を放り投げて慌てて駆け寄ると、自分でつけた男の傷の治療を始める。

手を当てた部分がホワッと輝きはじめるのを見て、アレックスは気づけば苦笑してしまっていた。

「笑ったな？」

腕を組んで成り行きを見守っていた青年が、ニヤリと口元を歪めた。

意地の悪そうな笑顔で、それは正確に彼の人格を表している。

「……ああ」

降参というように手を上げ、アレックスは構えていた剣を鞘に収めた。

場を支配していた緊張の糸が解ける……というか、ちょっと前からグズグズにはなっていた。

「……どうやら、また生き延びてしまったようですね」

「ふえーん、良かったよー」

「てか、あれで死んだら人生思い切り過ぎでしょ」

頭を振りながら起き上がる着流しの男を、泣きながら手伝う海賊少女に、呆れるようにガントレットの少女。

「……相変わらず、真面目な話一つ出来ないな」

「知るか、羨ましかったら戻って来い。菓子折り付きの土下座で許してやらんこともない」

昔から、素直でないようにいて実はかなり素直な性格の親友の言葉に、アレックスの笑みが深くなる。

それでも、首は横に振った。

「それは、出来ない」

「あっそ。関係ないけどね。土下座してもらっし」

意に介す風でもなく、自信満々といった様子で返す青年。

殆どの場合無意味に胸を張っているが、それが彼の常態だった。つまり、いつでも無意味に自信満々なのである。

酷く我が儘な生き方だが、当人にもまた別の言い分がある。

——自信がなくて、勇者などやっていられるか。

勇者。

唯一魔王に傷を付けられる存在で、希望という名の人類最後の手段。

その身にかかる重圧は相当のもので、過去、聖剣に選ばれ、プレッシャーに押しつぶされた者達も少なくない。

そういう意味では、彼は天性の勇者と言えた。

「あのさ、アレックス」

そんな勇者の影に隠れるようにして立っていた男が、ひょいと顔をのぞかせた。

パイルアップと言う大衆新聞の記者で、エリックという名前だった。

とある街で出会って以来、密着取材ということでこんな所までついてきてしまっている。

「本当に戻ってこないのか？」

アレックスは無言で頷く。

どうして？ と問が重なる。

それには答えず、アレックスは鋭く口笛を吹いた。

「本当は、ここで引き返してくれるよう説得するつもりだった」

「やなこった」

「……だから諦めた」

ふふんと鼻で笑う勇者に、アレックスも苦笑で返す。

その時、大きく羽ばたく音が聞こえて、崖下から巨大な鳥が姿を現した。

鷲によく似た姿をしていたが、足の部分だけで人一人分はありそうな巨体が、その場でホバリングを始める。

嘴には轡がはめられ、そこから伸びる手綱を無表情の幼い少女が

操っていた。

それを見て、勇者が瞳を輝かせる。

「アレックス、早く乗れ。トリがお腹をすかせている。それに延長は追加料金だぞ……………なんだお前？」

いつの間にか、アレックスのすぐ隣まで近づいていた勇者が、目をキラキラさせながら、巨鳥を指差した。

「いいな、それ……………よこせ」

「嫌だ。トリは私の大切な友達だ。よこせるか、山賊め」

「……………エミ、こいつは一応勇者だ」

アレックスのフォローに少女——エミは黙りこんだ。

表情に驚きこそ出なかったが、その沈黙は長い。

やがてボソリと一言。

「世も末だな」

吐き捨てるように言い放った。

「なんだとこのチビ！ いいからそれよこせ！」

「うるさい。お前なんかただの山賊だ。山に帰れ」

「ここだって山だ！」

こんな霊験あらたかな場所で、くだらない喧嘩を始めてしまった二人に、溜息をつく一同。

その中から、ガントレットの少女が進みでた。

「ねえ……………一個聞かせてよ」

アレックスが振り返る。

少女は真横を向いていた。

「私たちから離れたのって、その、あんたが魔族だから？」

不安げな表情に、サイドテールが揺れる。

アレックスは少し考えた後、首を横に振った。

「……………人にも魔族にもイイ奴とイヤな奴はいた。俺が一番居たいのはここ（・・・）だ」

じゃあ、戻ってくれば？ とは少女は言わなかった。

何かを噛み締めるように俯いて、直ぐに顔を上げるとアレックス

の方に向き直る。

「ぶつ殺しに行くから！」

満面の笑顔で怖いことを言う。

彼女らしい一言に、アレックスも笑った。

「……ああ、待ってる」

「殺さないように手加減なんてできませんよ？」

着流しの男が、困ったように頭をかいた。

「さ、寂しくなります。でも、今度はお別れを言えるだけ良かったです。お元気で」

「いや、元気だったら不味いでしょう」

「あ、ああ、そ、そそそうですね！ えい！ 呪われる！」

ツッコまれて、パにくった海賊少女が目をつぶって両手をつきだす。

でろでろんと本当に呪われた。……エリックが。

「へ？ ってなんでこんな所にバナナの皮……ギャア！」

黄色い物体に足元を掬われ、ゴロゴロと転がっていくエリック。

「あ~~~~~」

悲しげな悲鳴を残して、そのまま崖下へと転落していった。

「エミ！」

「トリ、あれを拾え」

少女が手綱を引くと、巨鳥の眼が細まった。

羽を閉じて急降下を始める。

すんでの所で文字通り驚掴みにされたエリックが、ひいひい言いながら戻ってきた。

「なんて人に迷惑をかける大人なんだお前たちは」

「……すみません」

無表情のままつぶやくエミに、勇者を除いて全員が揃って頭を下げた。

「人命救助は仕事になかったからな。追加料金だぞ」

分かってる、と答えて、アレックスは巨鳥の上に飛び乗った。

エミの後ろから被さるようにして、手綱を握る。

「アレックス！」

馬首をめぐらそうとした所で、勇者が声を上げた。

何事かと見つめるアレックスに向かって、ピツと親指を立ててみせた。

そのまま首を掻き切る動作をした後、グンっと下に向けた。

無意味に自信に溢れた笑顔で。

それに対するアレックスの答えは、エミにしか聞こえなかった。不思議そうに見上げてくる少女の頭を撫でてやり手綱を操った。

「……ああ、決着は、魔王城で」

第二十話 決着は魔王城で（後書き）

本日のb g mは相対性理論のストラ警備隊でございました。

第二十一話 聞き間違いじゃない

「——って、仰ったんですね？」

アイルネのその声は、むしろ、懇願しているような音色で響いた。お願いだから「うん」って言うて。

目の前に佇む男——アレックスは真顔のまま頷いた。

望み通りの返答のはずなのに、ちっとも嬉しくないのが不思議。今、誰もが恐れてやまない魔王城の、その大広間は、改装の真っ只中にある。

割れたガラス窓の取替えや壁面と天井の修復の為に組まれた足場が、部屋の総面積を小さくし、さらに詰め込まれた人員が、かつて無いほどこの空間を息苦しい物に変えていた。

壁には日程表が貼られ、大幅に前倒しに修正されたデットラインから伸ばされた矢印には、「絶対絶対厳守！！！」とエクスクラメーション三つ付きで添え書きがあつた。

その通り、事態は切迫していた。

アイルネにとって、専門外の慣れない作業（主に畏関係）に、多種族混同による魔族との言語コミュニケーションの未成立。

その他色々要因はあつたが、ここまでスケジュールを圧迫したのは、やはり昨日もたらされた報告が原因だろう。

——勇者が村を出発した。

羽根付きの魔族は嬉しそうに情報を口にしたが、そのそれ（リアクション）は相当違うんじゃないか、という思いと共に、四徹が決定した事をアイルネは静かに悟った。

（あー、またベッドで寝られないんだ……）

目を見開いたままじわりと涙がにじみかけた。

それをゼロコンマ単位で乱暴に拭い払う。

何をしていようと時計の針が動くのが同じなら、涙を流すより仕事に戻ったほうがいくらかマシと思ったからだ。

そうして、勇者やらあれこれは、とりあえず頭の片隅に残しつつ忘れることにして、アイルネは仕事に戻った。

時間の神様に恨みでも買っているような速さで夜と朝が入れ替わり、ああ——明けた……。と、朝日に切なげな眼差しを向ける。

そのまま作業を続け、昼休憩に軽く仮眠をとってリフレッシュをし、さてこれからと気合を入れ直した矢先。

「妹の結婚式に行きたいんだが……」

人間の国の礼服を身に纏った青年に、そう言われた。

最初、アイルネは首をかしげた。

疑問が完成する前に答えに行き当たる。

（中庭で見た人……確か、アレックスさん）

次いで耳を疑った。

「あの、すみません、よく聞こえなかったのもう一度言ってもらえませんか？」

彼の事情はいくらかは知っていた。

決して多くはないが、人間に育てられたこと、勇者の仲間だったことくらいは知っている。

それから、霊峰での勇者達との別れの際のやり取り。

——決着は魔王城で。

これは、後からカイルに聞かされた。

アレックスは頷くと、もう一度同じ言葉を口にする。

「妹の結婚式がある。それに行きたい」

……あれ、変だな、聞き間違いじゃない。

第二十一話 聞き間違いじゃない（後書き）

やっぱり前話をもつちよつと短くシリアスにすべきだったかなと反省してます。

第二十二話　つまりそういうタイミング

向かい合うアイルネとアレックスを沢山の魔族が取り囲んでいた。広間の作業と比例するように種族も多様で、見本市とは行かないまでも、物産展くらいには顔ぶれが豊かだ。

昼休憩のため、食べ物、あるいは全然そうは見えないモノを口に運びながら、二人のやり取りを趣味の悪い視点で眺めている。

「言われたとおりに槍の回しゅ……わーなんだこの状況は」

大広間に戻ってきた教育係が眼にしたのはそんな光景だった。

アイルネがちょっと近づいただけでひゃつと声を上げて飛び退いたり、今は構ってられないような些細な事で作業員に説教を始めた、拳句には、解体作業に心を痛め歴代魔王との思い出をさめざめと涙乍らに語り始めたりと、基本的にいつも邪魔だったため、主戦場から外され『飛び出す槍フロア』の槍の回収をアイルネに頼まれていた。

やんわり「スゲー邪魔」と言ってくるアイルネに対して不満を抱きながらも、あんまり近くに來られると嫌なので、逃げるように広間を飛び出したのが三十分前。

子供からオモチャを奪っているような気持ちになりながら、何とか嫌がる兵士たちの手から槍を回収し、戻ってきてみればこの有様だった。

何事が起こったのかいまいち掴めず立ち尽くしていたところに、見慣れたコック帽が見えた。

二人を囲む輪からは少し離れた所で腕を組んで傍観している。

小走りで駆け寄って声をかけた。

「クオヴレー。何事ですかこれは？」

「おお、これは教育係殿。御一ついかがですか？」

クオヴレーはいつもより青白い顔で、ケータリング用のワゴンの一つを指差した。

「いえ、先ほど陛下と一緒にいただきましたので」

「ふむ、そう言えばそうでしたな」

やはり彼も疲れがあるのだろう、言われて、思い出したようにしたり顔で頷く。

ちなみに、現在魔王陛下は食後のお昼寝の真っ最中だった。

今の魔王くらいの時期の魔族にとっては、食っちゃ寝食っちゃ寝することも大切な仕事の一つである。

そうして、急速に成長していく心に合わせて、体のほうも成長させていくのだ。

そういった空いた時間にわざわざこちらを手伝いに来ているというのに、あの人間の小娘の態度はどうなのだろうか、と教育係は思う。

他にも勿論やるべき事はあったが、優先順位を考えてこちらに手を割いている。

にしては、邪険に扱い過ぎじゃないか？

というのが、偽らざる教育係の思いだった。

ただ、あまり力になれていないことも自覚はしていた。

(向き不向きというものもありますし……)

見る見る悄気げていく教育係だったが、なんとか気持ちをとりなして、クオヴレーに事の詳細を求める。

「それが吾輩もつい今しがた来たばかりでしてな。なんとなく聞こえた限りでは、結婚がどうか……」

「結……婚？」

その言葉の意味を正確に脳が捉えた瞬間、ヘチャリとその場に崩れ落ちた。

魂の抜けた顔でホケーっとしている教育係を意に介した様子もなく、クオヴレーは語り続ける。

「うむ、アレックスが結婚がどうか言った後、メイド殿が今は時期が悪すぎるとか何とか」

悪夢だった。

クオヴレーの声もほとんど耳に入ることはなく、教育係の頭には結婚の二文字がぐるぐると回っている。

魔族は自由恋愛を認めている。

家柄に関係なく結婚も出来たし、異種族間の恋愛に関しても割と寛容だった。

それでも相手が人間というのは話が別だ。

そういった例がこれまでにないではなかったが、どれもあまり良くない終わりを迎えたと聞いている。

一番大きな理由は、やはり寿命の違いだった。

種族によってまちまちとは言え、基本的に長命な魔族に対し、人間の生はあまりにも短い。

人間と夫婦になったある魔族などは「生きている時間が違った所為で何もかもが悲劇になった」と語っている。

文献でそれを読んだ教育係は、その魔族を、馬鹿馬鹿しいと一笑に付した。

『そんなもの、別に魔族同士でだって同じでしょうに』

それは、なにも魔族と人間に限ったことではなかった。

違う時間を生きているのは魔族同士でだって同じ事で、番になっっがいたからと言って、なにも同時に死が訪れるわけでもないのだ。

それぞれが持つ限られた生の中で、他者とわずかに交わった時間だからこそ、そこには眩いほどの価値が生まれる。

それが、安らぎを与える類のものであるなら尚の事だ。

少なくとも、彼はそう思っていた。

まるで、出会いそのものを後悔するように綴られたそれを、教育係は呆れたようなため息と共に閉じた。

『まあ、好き好んで人間と結婚されたような方ですから、そもそも理解しようというのが無理なのかも知れないですね』

数多くの魔王と出会い、心を近づけ、そして別れていった教育係はそう結論づけた。

だから、今回もそんな事はどうでも良かった。

問題は。

（と、と、言う事は……あ、あの人間は、これが終わっても、しばらく、こ、こ、ここに居るということですか……？）

紛れも無い、悪夢、だった。

近い未来を想像したパニックから、地べたに腰をついたままお得意の白目になる教育係の前で、起きてるのか眠っているのか分からない様子で黙って腕を組むクオヴレー。

アイルネとアレックスは相変わらず何かを言い合い、その周りを相変わらず沢山の魔族が時折ヤジを飛ばしながら囲っている。

「アイルネ、動く床の試運転をするから来t……わーなんだこの状況は」

大広間にカイルが入ってきたのは、つまりそういうタイミングだったのだ。

第二十二話 つまりそういうタイミング（後書き）

二度目の予約投稿うー！

ちゃんと上手く行ってるんでしょうか？w

今回ラブコメでありそうな誤解のシーンを使ってみました。ラブコメでないと本領発揮しないと分かりました。

それが分かっただけでも良いや。良いです。はい。

第二十三話 魔王城へ続く空の下

大きなお腹を触らせながら、彼女は優しく囁いた。

「アレックス、ここにあなたの弟か妹がいるのよ。……そう。ほら

……ね？ ……うん。ふふ、優しいお兄ちゃんになってあげてね」

言われて、幼いアレックスは愕然とした。

手のひらに触れた部分、母親のお腹越しに、まだ肺呼吸も出来ていないはずの弟だか妹だが、自分のことをやたらと蹴ってくることも気になったが、彼女の言葉はそれ以上に彼に衝撃を与えていた。

——優しいお兄ちゃんになってあげてね。

自分はそもそも魔族だったはずだ、と彼は思う。

それが、気がつけば、縁もゆかりもない戦場跡で拾われ、名を与えられ、人間の両親が出来、顔見知りのいない土地で、人間の服を着て、知らない家に住んでいる。

誰の所為かといえば、ぼーっとしていた自分以外にないのだが、それでもようやく今の状況に慣れてきていたところだったのに、この上優しいお兄ちゃんになれと、母親は言う。

えらい難題を押し付けられた気分だった。

普通の人間のこともよく分からないのに……そういう思いはあったが、同時に、そういう事なら仕方ない、とも思った。

こうして、アレックスの手探りの優しいお兄ちゃんへの道は始まった。

間もなく妹が生まれ、フィナと名付けられた。

フィナはベビーベッドの上で一日中横になって過ごし、時折、白くて酸っぱい匂いのするものを口からケロツと吐く以外は、寝てるか泣いてるかのどちらかだった。

商人だった両親はいろいろな用事で外出する事が多く、フィナの面倒は自然アレックスが見ることになった。勿論、お手伝いさんなどはいたが。

優しいお兄ちゃんの手がかりは少なかったものの、近所に住む別の家の兄弟たちの見よう見まねで接している内に、この、初めて出来た人間の妹の事が色々と分かって来た。

泣いてる時は大抵お腹が空いてるかオシメが汚れているかのどっちかだという事、それ以外の時は抱っこすると安心して泣きやむ事、食後背中をトントンしてやるとゲップをして白くて酸っぱいものをケロッと吐かなくなる事、泣き止んだ後の瞳がキラキラしてて綺麗な事。

やがて歩けるようになったフィナを連れて散歩に出ると、近所の奥様方から微笑まし気な視線と共に「仲の良い兄妹ね」と言われるようになった。

優しいお兄ちゃんには程遠いと、アレックスは肩を落とした。その頃になると、フィナはアレックスにベッタリのお兄ちゃん子になっていた。

が、これは無理からぬ事だった。忙しい両親の代わりに、フィナの寂しい気持ちを、全てこの不器用な魔族が埋めていたのだ。

母親の言葉は、本人が思っているよりもずっと、彼の潜在意識の深いところに根付いてしまっていた。

その根は広がりこそすれ、枯れることは決してなく、更に、時間は経過する。

ベッドで眠っていたアレックスは、扉が開く気配と、廊下から漏れ入った光に重たい瞼を瞬か^{しばた}せた。

上半身を起こして部屋の入口を見ると、もはや見慣れた小さなシルエットが、枕を大事そうに両手で抱えて立ち尽くしている。

「……どうした？」

深夜であつた為、彼は声を潜めてその影に語りかけた。

「……おにいちゃん……こわいのだ……」

少しの沈黙の後、舌足らずな、明らかな涙声が返ってくる。

怖い夢でも見たのだろう、眠い目をこすりながら、アレックスは部屋の入口まで迎えに行つてやる。

傍によれば、涙と鼻水で感心するほどぶちやいくな顔になったフィナがいた。

屈んで両腕を開くと、すぐさま首つ玉に抱きつかれる。

「……今日はどんなのだつた？」

「しらん……5」

「知らん、って……多いな」

今日は数で攻めてきたようだ。

顔を押し付けてくるフィナの背中を叩いてやりながら、アレックスは諭すような声を出す。

「何も心配いらない。どれだけ出てこようがお兄ちゃんには負けないからな」

事実だつた。

そりや今でこそ、人間の子供以上優しいお兄ちゃん未満というよく分からないポジションにいたが、それでも根っこは魔族である。

たかだか人間の見る悪夢ぐらいに負けていては、とてもやっていけないのだ。

自信を持つて応えてやると、フィナはおずおずと顔を上げた。

「ほんと？」

「ほんと」

フィナの鼻から自分の頬に掛かった粘っこい橋を解体しながら、止めにちゃんと鼻を噛ませたハンカチをポケットに入れて、アレックスは妹の頭を撫でた。

ポンポンと軽く叩いてやって、自分の背中に両手を隠した。

「よし……フィナ、良いものをやる」

まだ不安そうな顔をしている妹の前に、握った両手をつきだした。

「なに？ ……へいわ？」

「大きすぎる。手の中に入らないだろ」

冷静にツツコミつつ、両手を軽く振ってみせた。

「……どーっちだ？」

途端に、フィナの顔が輝いた。

しばらくうんうん考えた末、右手に手を伸ばす。

指先が触れかけた寸前、すつと手が引かれた。

ビックリしたようなフィナに、アレックスは首を横に振る。

「フィナ、よく考えて。……どーっちだ？」

もう一度、今度は左手をやや前気味に、両手を出す。

どーっちだ、も、なにもない。

「わかった」

首をかしげて考える素振りを見せ、フィナ。

「フィナ、良いか、よく考えろ」

すぐさま右手に踊りかかってきたフィナを抑えつつ、アレックス。しばらく、異様に右手に執着を見せるフィナを抑えていたが、やがて、アレックスはため息を付いた。

一度体を離して、背中にもう一度両手を隠し、中身を入れ替える。

「……ゆびわだ！」

そうして、ようやくフィナはその中身を手に入れた。

あるいは、手に入れさせることに、アレックスは成功した。

それは銀の指輪だった。

装飾もなく、輝きはくすみ、明らかに安物とわかるシロモノだったが、子供のお小遣いで買うには高い買い物だったろう。

「銀には魔除けの効果があると言われてる」

それを魔族である自分が所持できている事に疑問は感じるものの、この場合は背景と説得力が大事だった。

物質的にフィナにかかる実害は、全て自分が叩き潰す気であるアレックスである。

夜一人で寝られないフィナの為に、精神面での気休めとして先日買っておいた物だった。

「ほー」と感心したような声を上げ、人差し指にはめてみる。

ブカブカのそれを見て面白そうに笑声をあげた。

「これで、一人でも安心して寝られる」
「うん」

暗闇の中でも輝くような笑顔で、まだ居心地が悪そうな指輪をフィナは眺めた。

「おにいちゃん」

いつの間にか旅立っていた枕をピックアップし、フィナは兄の方へと顔を向けた。

「いつしよにねていい？」

「……何故だ」

いつものようにベッドの半分を占領されつつ、アレックスが”優しいお兄ちゃんへの道の険しさ”を実感したかどうかは、誰にも分からない。

（……なんか、変なこと思い出しちゃった）

純白のドレスに身を包んだ少女は、クスリと笑みをこぼし、首元に手を伸ばした。

既に慣なになつてしまっているその仕草で、小さな輪を指先で弄もてあそぶかつて指輪だったそれは、体の成長と共に本来の居場所を失い、今はネックレスとしての役目を果たしていた。

「フィナ、準備できた？ ……やだ、すごい綺麗」

「ありがとう」

感極まったように口元を抑える付き添い役の友人に笑顔を返して、フィナは首を傾げる。

「もう時間？」

「そろそろ。……いよいよね！」

自分より余程気合の入っているような友人を苦笑で見送りつつ、フィナは近くにあった椅子に腰掛けた。

静かに目を瞑り、銀色のお守りをくれた人の事を思う。

（お兄ちゃん……どうか、無事に帰ってきてね）

その人は、今、聖剣に選ばれた勇者と共に、魔王城へと続く空の下にいる筈である。

第二十三話 魔王城へ続く空の下（後書き）

間が空いてしまつてすみません（土下座）

読んでくださつて、本当にありがとうございます。

今回出てきた『フィナ』が時々『フィノ』になっているかも知れませんが、別のキャラと言うわけではないので、ご注意ください。

一応「誰だこれ、誰だこれ……」って言いながら修正したんですが、見落としがあつたら直しますのでそつと一言いただけるとありがたいです。

では。

第二十四話 カイル、教育係の言葉に首をかしげる

目の前で、真摯な表情で頭を下げた青年に、アイルネは困り果てていた。

困り果ててはいるものの、どうしてかその正体が知れない。

実際、一番困っているのは、『何に困っているのか』自分でもいまいちよく分からない所だった。

勿論作業のことはある。

ここで人手が減るのは確かに痛かったが、この規模と人数で、一人抜けたくらいで成立しなくなるのなら、それは端から無理な話だったと言うことだろう。

アイルネは無理だとは思っていなかったから、これは理由にならない。

むしろ、アレックスの望みを叶えてやって、とつと仕事に戻りたいとかちよつと前から思い始めているくらいだ。

それなのに、「行きたい」と言われれば、何故か「えと、困ります」と答えてしまう。

首をかしげつつも、引つかかっているのは、やはりあの約束だった。

——決着は魔王城で。

(……………アレックスさん……………魔王城に、居なくていいのかな?)

淒く素朴な疑問だった。

ただ、もしかしたら、アレックスが”居ない”事自体が決着になるような事がある……………あるのか、そんな事が?

とてもじゃないが、居ない事事態が答えになるような、そんなセンチメンタルな決着が魔王城に存在するとは思えない。

魔王城の広間で「いない……………か」などと寂しそうに呟く勇者など、そう見たいものでもないのだ。

という事は、決着とはやはりアレックスと勇者たちの所謂”決着”のことで、それなのに、魔王城にアレックスが居ないというのは、それは、誰かが物凄く気まずい思いをする事になる。ということに他ならない。

仮に、そこに自分が駆り出されたと想像して、アイルネは一瞬で青ざめた。

「アレックスはどこだ？」

「えと、すみません、ここにはいません」

「ここにいない？ ではどこに居る」

「その、妹さんの結婚式に行かれました」

「……………何故？」

「……………どうしてもと言われるので」

「……………そんなはずはない。君は知らないかも知れないが……………」

「いえ、その、知ってます。ここで決着を付けられるんですよね？」

多分、小一時間は問い詰められる。

そして、謂れのない理不尽な糾弾を受けることになるのだ。

勿論、ここまで馬鹿正直に話す必要はないが、アイルネは頭を抱えたくなった。

重ね重ね、時間がない。

アレックスを喜んで見送れないのもこの時間が問題で、つまり全ては時間が悪い。

それこそ理不尽な怒りを時間にぶつけながら、アイルネはインナースペースに入り込んでいた。

アレックスはアレックスで、言いたいことは全て言っている為、殊更開く口もない。

突然黙りこんでしまった二人に、ざわつき始めたギャラリーの中から態とらしい咳払いが聞こえた。

コホンと口で言いながら、人垣をかき分け教育係が進みでてきた。

「話は大体聞かせてもらいました」

後ろから遅れて二つの人影が出てくる。

離脱のタイミングを失った半寝のクオヴレーと、教育係の言葉に、
本当かなあ？ と首をかしげるカイルの姿がそこにあった。

第二十四話 カイル、教育係の言葉に首をかしげる（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。

本日のbgmはMr Childrenの「ニシヒビガシヒ」でございました。

……アレンジが多すぎるっす。

第二十五話 夢から覚めるように

教育係にとって、このアレックスという若い魔族は、少々厄介な存在だった。

嫌っているわけではないし、無論、敵対する関係にあるわけでもない。

というよりは寧ろその逆で、普段厳しく光っているはずの彼の目が、どうしてもアレックスを見る時に甘くなってしまう自覚がある。理由は簡単で、教育係が、アレックスの生い立ちに同情したのだ。彼は、年端もゆかぬ頃遊びに行った戦場跡で、凶悪で凶暴な人間（歯は殆ど鮫）に攫われ、そのまま何年間も人間との暮らしを強要されていたが、この程、ようやく命からがらこの魔王城に逃げ込んできた。〃自分なら舌を噛むくらいの苦境。

辛い境遇に遭い続け、それでも魔族としての誇りを失わずにいた悲劇の戦士。

と、というのが教育係の見え方である。

感情的な部分を除けばほぼ事実で、初めてアレックスにこの話を聞いた時、彼は自前の猫柄ハンカチをこっそりと涙で湿らせた。

実際は、諾々と流されていたアレックスの責任も小さくないのだが、誤解は全人類共通の悪癖で、それが魔族に当はまらない訳でもない。

この誤解も解こうと思えば解けるのだろうか、なんせ相手はアレックスである。

妙な所で物分りが良いために、何年も人間として暮らしてきた彼に、そんな甲斐性は存在しなかった。

というわけで、教育係は殆ど苦手意識すら覚えるほどアレックスには甘かった。

なるべくなら彼の望みは叶えてやりたいと思うのだが、結婚、ともなると軽々しく、はいどうぞ、と言うわけにもいかない。

その上、相手は自分の苦手な人間、しかも、この小娘である。
気持ちの上ではアレックスの味方、でも彼の望むことは自分にと
って敵しすぎる（舌嚙む）。

そんな中途半端な思いが、不躰に話に割り込んだ立場を表すよう
に二人の中心に教育係を立たせ、やっぱりこの距離はまだちょっと
無理、と思いアレックスの隣に改めて立った。

そして、至近距離でアレックスの方を向き、
「残念ながら、私も貴方の考えには反対です」
言い放った。

（……だったら、どうしてこちら側に立ったんだ……？）
とアレックスは思ったが、他に不思議そうにしている人も居ない
ので黙っておく。

この辺の物分りのよさが、今の状況を生んでいることには気づか
ない。

代わりに「何故だ？」と、尋ねた。

「いや、何故だ、と言われましても、そもそも人間と魔族ですから」
ナニヲアタリマエノコトヲ、と言うような表情で教育係は言った。
痛い所を突かれたように、グツ、と、アレックスが詰まる。

それでも苦しそうに、反撃を試みた。

「……だが、妹だ」

「妹っ!？」

「え、どうして私を見るんですか？」

アレックスの言葉に、突然自分の方にグリーンと首を動かして目を
剥いた教育係に、アイルネがたじろぐ。

「あ、い、いえ、あまり似てないと思って……」

「えと、誰に？」

しかし、アイルネの言葉は無視された。

顎に手を当てた格好で、教育係は黙りこんでしまう。

（ま、魔族と人間というだけでもアレなのに……この上、きよ、兄
妹同士でだなんて、本当にアレじゃないですか!）

もうこの時点で彼は一度ぐっすり眠るべきだが、思考は空回れば空回るほど本人は自覚しにくいものである。

少し考えれば、種族が違うなら実の兄妹でも在り得ないと分かりそうなものの、それには気がつかないまま、アイルネに距離を取りつつ詰め寄るといふ器用な真似をやったのける。

「というか、貴方はそれでいいんですかっ？」

言外に、こんなアレなお兄さんで、という目で見ろ。

しかし、アイルネはちよつと考えこむようなポーズを取ると、少しだけ諦めたように口を開いた。

「そうですね。確かに私も最初は反対だったんですけど、私自身も明確に反対の理由が見当たらないというか……一生に一度のことですし」

伏し目がちに達観したように微笑むアイルネに、教育係は、コイツもか、と絶望的な気分になった。

（モラルはどこに行ったんですかモラルは……）

歳相応に年寄り臭い事を思いつつ、がっくりと肩を落としそうになるが、アレックスがその言葉に顔を輝かせたのを見て、慌てて二人の間に割って入る。

だが、アイルネが決心を固めるほうが早かった。

「……そうですね……一生に一度のことですもんね……うん！アレックスさん、良いですよ！」

「……本当かっ？」

「はい」

ニッコリと笑って頷くアイルネ。

完全に何かを覚悟した顔で、その表情は晴れ晴れとしている。決して意見を翻さないだろう決意がそこに見て取れる。

嬉しそうなアレックスにがっくりと教育係は腰を落とした。というか抜けた。

へたり込んだまま、死人のような顔をアイルネに向ける。

「……本気、なんですか？」

「はい」

おおおつと野次馬たちから、悲鳴ともつかない声上がる。

「多少スケジュールの方はタイトになつてしまいますが、でも最悪指揮だけなら一人でも出来ますから」

「し、式つてそういうモノでしたっけ？」

ジェネレーションギャップというやつか。

教育係は、新郎新婦のどちらかしか参加しない結婚式なんて聞いたことがなかった。……当たり前だ。

「も、もつと自分を大切にしなさい！」

「えと、教育係様がそれを仰るんですか？」

やけくそに叫んでは見たものの、わけのわからない言葉で返された。

……だが、それももうどうでもいい事だ。

この二人は愛しい結婚し、そして、小娘は魔王城に居座る。

「悪い」

教育係の目から、暗澹たる未来を思い涙が落ちそうになった時、意外な所から一筋の光明が差した。

「三人に質問があるんだが、良いか？」

これまで、野次馬に徹して傍観していたカイルが片手をあげていた。

教育係に答える気力は残っておらず、どうぞ、と代わりにアイルネが答えた。

「アレックス、アイルネに何を頼んでたんだ？」

「……妹の結婚式に行きたいと頼んでいた」

「そうか。アイルネ、近々誰かと結婚する予定はあるか？」

「な、ないですよ！ 何言ってるんですか！」

「うん。教育係殿、どうして落ち込んでるんだ？」

「……決まってるではないですか。アレックスとこの小娘の結婚が決まったからです」

「……」

その場に、沈黙が降りる。

カイルだけがくつくつと笑いながら、パンツと手を叩いた。

「と、いう事だ」

「……はあ？」

異口同音が重なって、夢から覚めたように三人は顔を見合わせた。

第二十五話 夢から覚めるように（後書き）

分かりにくかったかと思いますが、ようやくオトせました…。

そして、二章入ってから、全てこの為の前フリだったという事実w
（それだけじゃないですがw）

もし変な所があったらそつと教えて下さい。

ここから、お話は終わりに向かっていきます。

出来れば、最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

この度は、読んで頂いてありがとうございます。

では、また。

第二十六話 未だ幸せそうな彼（前書き）

身代わり……で合ってるのかな？

第二十六話 未だ幸せそうな彼

「なるほど、義理の妹さんの結婚式に参列するんですか、そうですか」

ウンウンと頷き、心底安心したように、教育係は額を拭った。

やけに機嫌よさげで、先ほどまでと比べて目には生気が宿り、忘れられがちな美貌ステータスも正常値に戻っている。

「……どこかで気が付きそうなものだが」

事情を説明し終えて、呆れたように呟くアレックスを「まあまあ」とカイルが宥める。

二人のやり取りに気がつかないほど安堵に打ち震える教育係は、そんなお姿ですら貴き様になっていた。

周りを囲んでいた野次馬たちは、既にそれぞれ散って作業へと戻っている。

五人は広間の邪魔にならない隅の方で話し合っていた。

「ただ、アレックスが人間の国に行くとすると、こちらをどうするかが問題だな。勇者たちが来城するまで時間がない」

一番の問題点を口にして、カイルがアイルネの方を見た。

アレックスはかつて仲間だった勇者たちと、魔王城での決着を約束している。

「式はいつなんだ？」

「明後日だそうです」

その答えに、カイルは眉を顰める。

「なら今日礼服を着ているのはどうしてだろう、と思ったわけではない。」

カイルは、勇者たちが魔王城に来るまで、早くても後四日はかかると見ている。

単純な距離に、野生の魔物達のおおよその分布、それに足止めに放った部下達の数で判断した。

勿論それより時間がかかる可能性のほうが高かったが、相手の動きを予見できない以上は油断は禁物だった。

予想よりも更に早く到着する可能性だってないわけではない。

いくら魔族が移動をあまりハンデにしないとは言え、アレックスの実家（？）のある国まで行って帰ってくるとなると、時間的にはかなり微妙なところだった。

「なるだけ全部上手くいかせてやりたいがなあ（↑勇者と戦えれば何でもいいため割と他人事）」

カイルは小さく呟きながら顎に手を当てた。

魔王城近辺に出している見張りからはまだなんの報告もない。

とはいえ、そこを楽観視するわけにもいかず、最悪アレックスがいない場合の対処も考えておいて間違いはないだろう。

「そちらはもう仕方が無いですね。私をご説明するのが筋だと思います」

アイルネはそう言ったが、これにはカイルが渋い顔をした。

「万が一って事もあるからな。出来れば勇者たちがやってきてバタバタする前にアイルネは帰って欲しいと思ってただけ」

驚いたようにアイルネはカイルを見るが、

「で、ですが、それですと他の方にお任せすることに……」

「いや、それは良いんだ。ただ、実際カッコがつかないのがな」

うーんと悩みこむ一同——除く教育係。

「クオヴレーは何かアイデアないか？」

随分前から黙ったまま腕を組んでいるクオヴレーにカイルは話しかけた。

「ん……」

と、聞いてるんだかないんだかな反応をして顔を上げる。

「……吾輩は十二万四千二百歳だが？」

「聞いてないし、増えてる」

突然二万歳ほど老けこんだ半目のコックは、一度ぱちりと瞬きをする大きく目を見開いた。

「お？　おお、そうであつたな、吾輩は永遠の十万四十二歳であつた」

もつと早くに永遠を手に入れられなかったことが悔やまれてならないが、コック帽をかぶり直すとクオヴレーは身を翻した。

「我輩にアイデアはない。すまんが、まだ仕事があるので失礼するのである」

「え、でも、お昼終わったばかりですよ」

アイルネが言うところクオヴレーは顔だけ振り向かせた。

「夜の仕込みがあるのだ。なんせ大所帯だからな、一応吾輩の代わりに部下を置いてきたが、そろそろ戻ってやらんと」

「そうなんですか」

「……代わり……」

ご苦労さまです、と、頭を下げてクオヴレーを見送るアイルネの耳に、カイルのつぶやきが入ってくる。

「代わり……代わり、か」

「カイルさん、なにか思いつかれたんですか？」

「うん？　ん……身代わりを立てたらどうだろう？」

「身代わり……なんのです？」

「アレックスの」

きよとんとするアイルネ。

「……だが誰が身代わりになる」

直ぐにぴんと来たのか、深刻な表情で聞いてくるアレックス。

「そりゃあ……」

いたずらつ子のような笑顔を浮かべるカイルに釣られるように、二人の視線が、未だに幸せそうにしている教育係の顔に注がれた。

第二十六話 未だ幸せそうな彼（後書き）

この度は、読んで頂いてありがとうございます。

それから、お気に入り登録をくださった皆様、遅くなっちゃいましたが、拙作を可愛がって頂いて誠にありがとうございます。これからも頑張りますので、良ければ変らぬご愛顧をw

では引き続き二十七話をどうぞ。

第二十七話 軽くて着やすそうな胸当て

「ほ、本当にこれで上手くいくんですかっ？」

「あ、動いてはダメですわ、教育係様。ほら、うーしてください、うーって」

ここは兵舎にあるアレックスの私室。

魔王城に住み始めたばかりだからだろうか、簡素で粗末な石造りの室内にはほとんど私物のようなモノはなく、必要最低限の調度品のみが置かれている部屋。

そこで、教育係は、白衣のサキュバス（やたら楽しそう）に、いつもの礼服の上からアレックスの鎧を力づくで着せられている所だった。

鎧は、よく鍛えられた鋼鉄製の半甲冑で、防御力は高そうだったが、いかんせん体格差の問題がある。

長身の教育係にはかなり小さいものとなっていた。

長い髪を後ろで一つに纏めた教育係が、うー、しっつ、キツイ鎧にぎゅうぎゅう体を押し込まれながらも、それでも他の三人に目と口で『何か』を訴える。

「どうだろうな」

「いや、どうだろうな、って、んぶ……そ、そもそも、どうして私か」

アイルネ、アレックス、カイル、の三人は顔を見合わせた。

「えと、私は人間で、一応女ですから」

「……身代わりがあまり弱すぎでは話にならない」

「俺はカイルとして勇者たちと会った事があるし、できるだけ面識がない方がいいだろ」

「あの、あなた達なにか不思議なこと言ってますん？」

特に最後のお前。

申し訳なさそうに、あるいは、いつもと変らない感じで、はたま

た、心底楽しそうに。

それぞれ理由を口にする三人に詰め寄ろうとして白衣のサキュバスにパシンと頭を叩かれる。

身分も何もあったものじゃない。

素直に、うー、と両手を上げる。

「何が？」

「だって、私達全然似てませんよ!!」

至極真実な反論をする教育係。

ついさっきまで広間にいてかなり幸せだったはずなのに。

気がつけば、カイルに黙って手を引かれ、え、なんですか？と言ってる内にこの部屋に詰め込まれた。

そこには何故かこの白衣のサキュバスがいて、いつの間にかこんな事になっている。

「すぐに気が付かれるに決まってるではないですか……」

泣く直前みたいな声を出す。

どうなの？　っとカイルに聞かれて、アレックスは首をひねった。

「……かなりイイ加減な奴だから、俺みたいな格好をしていれば意外と気がつかれない、かも」

「それはもうイイ加減というより、どこかしらがお悪いんじゃないんですか？」

有り体に言って、頭。

悄然とする教育係だったが、それでも素直に言うことを聞いている。

白衣のサキュバスが、やたら好戦的で楽しそうな上に、彼の苦手な忙しいはずの小娘までが何故かこの狭い部屋に居るからだ。

この思いつき自体はともかくとして、迂闊に逆らいでもして……、と、考えると、身動きが取れなかった。

それに、他ならぬアレックスの頼み事でもある。

かなり過剰に評価しているこの青年に弱い彼は、黙って（黙っていないけど）、うー、するしかないのだ。

そうして、しばらく痛かったり情けなかったりしていると、白衣のサキュバスが声を上げた。

「おまたせしました」

アイルネたちの前、じゃじゃーんと蠱惑的に両腕を動かす彼女の後ろから、ぬつと鎧を着た教育係が現れた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

見るからにやつれ果て、見てるだけでも息苦しくなりそうだ。

首の辺りが圧迫されて、顔色がなってはいけない色に変色し、両腕は、上着の両袖から槍でも突き通されたように、ピンと伸びて脇も閉まっっていない。

明らかに、体に合ってなかった。

「……………」やだ、人間になりたがつてる力カシみたいですよ」
自分でやっておきながら、憮然としてそんな事を言うサキュバスに、アイルネは慌ててしーっと人差し指を立てる。

「……驚くほど可動域が少ないんですが」

ボンヤリと呟いて、腰のあたりから上半身を何度かひねる教育係。少ないというか、腰から上は全く自由にならない。

「……まあ、イケルな」

そんな様子を見ながら、カイルが嘘をついた。

「ハハ、確かに逝けそうですね」

酸欠だろう、全然元気が無い声で、教育係が珍しく皮肉を口にす
る。

「ま、まあまあ、この際はアレックスの鎧を着てるって事が大事なわけだから」

さすがにフォローするカイルである。

「この鎧、勇者の前で着けたことあるんだろ？」

「……いや？」

「ん、無いって」

「意味ないじゃないですか!」

首を横に振るアレックスに、もはや笑うしかないような様子で返答したカイルに教育係が絶叫する。

「というか、その鎧は、俺がこちらに帰ってきた時に、教育係殿が用意してくれたものだ」

黙考。

しかし直ぐにはっと顔色が（さらに悪い方に）変わる。

——そ、そうだった。

教育係がぐっつと膝をついた。

できれば手もついて四つん這いになりたい所だったが、今はそれもできない。なぜなら可動域が力カシだから。

（この鎧は、彼の話に感動した私が態々用立てしたものでした）

因果応報というかなんというか。いや、完全に善意ではあったんだけど。

途端に、過去の自分が憎くたらしくなる。

憎たらしく、そしてその頃の平穏な自分がかかなり羨ましくもあり、それがまた憎かった。

アレックスが淡々と、これまで旅の間に本当に使っていた大分軽くて着やすそうなワンスリーブの胸当てを見せてくれたが、もはやそんな事はどうでも良い教育係であった。

第二十七話 軽くて着やすそうな胸当て（後書き）

初めての二話連続同時刻予約投稿してみました。
はてさて……。

本当なら二十六、二十七、二十八話は一つにするつもりだったんですが、長くなったので分割させて頂きました。

それにしても……最近の数話を改めて自分で読んでみて……魔王陛下下ちつとも出てきませんね……w
なんか出すタイミングが……。
ちゃんと出番を用意しなくてはと思いつつ、このあたりで失礼します。

ではでは。

ちなみに二十八話にも出ません。

第二十八話 物凄い誤解をされた気がする

魔王城南側の壁面。には、ポツカリと大きな窓が作られた一角がある。

そこは空を飛べる魔族達の離着陸場のような場所で、巨大な楕円の下半分を切ったような形のその窓の両端からは、大きく半円にベランダが設けられている。

ベランダの円周からは無数に棧橋のような細長い足場が放射状に伸びて、間抜けな太陽のイラストみたいな外観をしていた。

魔王城に来て、最初にアイルネが足をつけた場所でもある。

そんなベランダの一隅。

順番待ちの、あるいは魔王城に帰ってきたばかりの魔族が、羽を休め憩いを得るための休憩所のようなスペース。

そこに置かれたソファで、沢山のサキュバス達を待らせ、お菓子をばくついている少女がいた。

年の頃は四、五歳といった所、表情はこうしている今も常にニユートラルで、感情は中々表にでないが、真正銘人間の少女だった。名前はエミ。

人間にしては珍しく、魔族に偏見を持たない一族の、その末姫である。

「エミ」

自分と呼ばわる声を聞いて、彼女は顔を上げた。

ソファの、というか、ソファに座ったサキュバスの膝の上からぴよんと飛び降りると、やってきた声の主に向かって手を振った。

「……遅くなった。待たせたな」

「大丈夫。可愛いがられてた」

無表情のまま、ソファの方を指さす。

はあくいつと手を振るサキュバス達を見て、声の主——アレックスが顔をしかめた。

「……変なこと教えられなかったらうな？」

「変なことって？」

「……いや、ならいい」

そう言つて、何故か頭を撫でられた。

よく分からないまま黙つて撫でられていると、アレックスの背後からバタバタと騒がしい足音が響いてきた。

現れたのは、有翼人、メイド、カカシ、カイル、アイルネ、教育係の三人組だ。

彼らの姿を確認して、エミは小首をかしげる。

アレックスの方を見上げた。

「相変わらずおかしなの近くにいるな、お前」

思い当たる節がありすぎて、アレックスは微妙な顔をする。

「そんな事より、行くなら早くしろ。そろそろトリのおやつのだ。私ばかりおやつを食べてたからちよつと拗ねてる」

背後からピューイと鳥の声が鳴り響いた。

ベランダの右端から伸びる棧橋の先、巨大な鳥が、抗議するように大きく口を開けていた。

手綱を抑えていた魔族が慌てて宥めにかかるが、意に介した様子もなくそつぽを向いて目を細めている。

「あれ、もしかして魔鳥の一種ですか……？」

トリを見て、驚いたようにそう言ったのはカカシ男だった。

エミから見ても、驚くほど容姿の整った男だったが、奇妙な装いが何もかもを台無しにしていた。

何故か皆から少し離れた中途半端なところに立ちながら、呆然と巨大な鳥の方を見ている。

そんな教育係を指さし、エミは残りの三人に責めるような口調で尋ねた。

「どうして誰もあいつに注意してやらないんだ？　なんかおかしい格好をしてるぞ？」

きよろきよろと顔を見回すと全員が気まずそうに黙る。

あゝ、と、頭をかいたのは有翼人の男だった。

「つと……趣味？」

その言葉に、エミが黙る。

彼女は表情で驚く代わりに、長く黙る癖があった。

「……魔族、か」

やがて、何もかもに納得したような顔で、ぼそつと呟いた。
なにか、物凄い誤解をされた気がする。

第二十八話 物凄い誤解をされた気がする（後書き）

すみません。

正直、文章を間引きすぎた感が否めません。

ただ、本当のことを言えば、五文字くらいの文字の羅列で、お話の全てを皆さんに伝えることができるような手段があればなあ、とか思ってたりにしてますw

第二十九話 芽生える不安

互いの自己紹介もそこそこに、アレックスとエミの二人はトリに乗って人間の国へと出発していった。

その際、ちよつとしたやり取りがあつて——アイルネは、二人の姿が消えた目の覚めるような青い空を見上げながら、その事を思い返していた。

サキュバス達が、出立するエミの周りを囲み別れを惜しんでいた。アレックスが言うには、エミは今日の朝こちらに到着したということから、出会って一緒にいたのはほんの数時間ということになる。

サキュバス達が人懐っこい性格だったとしても、やけに仲良くなつたものである。

「またね〜エミちゃん」

「いつでも遊びに来ていいよ〜」

「もうちよつと大きくなつたら色々教えてあげるわね」

純粹に（不純に）別れの言葉を交わしていると、しばらく相槌をうつっていたエミが徐々に顔を伏せていった。

「どうしたの？」

「うん。……可愛がつてくれてありがとう。お別れはとても寂しい」
サキュバス達との時間が余程楽しかったのか、彼女にしては珍しく、感情を現した言葉だった。

落ち込む少女を見て、可愛い〜と嬌声が湧き上がる中、一人のサキュバスがすつと彼女の前に進みでた。

先ほど、ソファの上でエミを膝の上に乗せていたサキュバスで、
にこにこ優しく笑いながら、膝を折ってエミに顔を上げさせる。
「むに〜」

両方から、むに〜と頬を引つ張られた。

「えとね、私たちも勿論寂しいよ。でもね、お別れの時に悲しい顔

をしてたら、また次も会いたいつて思えなくなっちゃうよ」

「ふゆぎ？」

不思議そうな少女に、サキュバスは頷いてみせる。

「うん、次。せっかく会えた最後が悲しい顔だったら、もう会えないみたいだもん。だから、お別れの時は笑って。また会いたいつて、次に会えるのを楽しみにしてるねって」

エミは頬を伸ばされたまま、自分を取り囲むサキュバス達の顔を見回した。

眼の前の彼女の言葉が本当で、今の変顔にウケてるのでなければ、みな自分との再会を楽しみに望んでくれてるらしい。

「また来て良いの？」

不安そうに言う少女に、サキュバス達は顔を見合わせて笑った。

「当たり前じゃん！」

「エミちゃんなら大歓迎だよ」

「色々教えてあげるって言ったでしょ」

笑顔の種類は様々でも、どの顔もまた会いたいと言っていた。

あまり変なことを教えられても困る、とアレックスは顔を顰めていたが、彼女たちは基本的に人の話をあまり聞かない。

あまり聞かないし、意に介さない。

そついう単なるハタ迷惑なヤツらなのだった。

そうして、ぎこちない笑顔を浮かべた少女は空を駆けていった。

「サキュバスは人との間に子を成します。夢の中で交わった相手と新しい命を作りますから、人間の、特に子供には甘いようですね」

こともあるように、と言い添えて、教育係が、聞いてもいないのに説明してくれた。

出番を終えた棧橋の上で、アイルネはぼうつと空を見上げている。こんな事をしている暇はないはずなのに、頑丈に張られた網が体を捕らえて離さないようにその場から動けない。

隣に誰かが立つ気配ある。

「さつきからどした？」

声はカイルのものだった。

さつきからというのは何時の事だろう？　この場所に来た時？

それともあの広間を出てから？

……駄目だ、わからない。

ただ、先程から脳裏に浮かぶのはカイルの言葉。

——万が一って事もあるからな。出来れば勇者たちがやってきてバタバタする前にアイルネは帰って欲しいと思ってただけだ。

「……やっぱり、魔族の皆さんって、優しい方ばかりなんですよ」

今も私のことを気にしてくれて……。

「アイルネ？」

そこで初めてカイルの存在に気がついたかのように、はつとしてアイルネは顔を上げた。

声にするつもりはなかったのだろう、驚いたように口元を抑えようと、顔をそらす。

「なんでもありません」

とても何でもない風には見えなかったが、そう言って振り返ったときには、笑顔になっていた。

アイルネの様子に、なにか感じて、怪訝そうにじっと彼女の顔を見つめるカイル。

「アイルネ」

やがて、もう一度名を呼び、真剣な表情のカイルが手を伸ばした。「ごめんなさい」

それを避けるように一歩後退して、アイルネはペコリと頭を下げた。

「まだお仕事が残ってるんで、私もそろそろ戻ります」
そのまま踵を返すと、逃げるように城内に戻っていった。

手を伸ばしたままの姿勢で取り残されたカイルの後ろから、亡霊のような気配が現れた。

「そんなおかしい格好でどうしたんですか？」

「……格好がおかしいのはあんただ」

前を向いたまま、^{いかめ}厳しい顔で、カイルは力カシにピシヤリと言い放った。

「仕方がないでしょう、これ一人では脱げないんですから」

振り返ると、さも不満そうに自分の体を見下ろしながら、教育係が上半身をグリグリひねっていた。

ちよつと、あつらえたばかりのドレスの出来を確認している人のようにも見える。

いや、やっぱり無駄に顔の良い力カシにしか見えない。

「そんなことより、なにか気になることでも？」

狂った方位磁石のような動きを止めて尋ねてくる教育係に、小さく首を横に振り、分からないとカイルは呟いた。

「……ただ」

「ただ？」

教育係から顔を背け、アイルネが去っていった方へと視線を向けた。

「……”また”あの顔してたな……」

「……なんです？」

「………なんでもない」

そのまま黙ってしまったカイルに、訳がわからないというように、教育係は首を捻る。

カイルと彼の視線の先を行ったり来たり見ながら——何往復かした所で、はっ、と何かに気がついたように震え始める。

「ま、まさか、貴方まであの小娘と結婚したいとか言いだすんじゃない？」

「……」
「もうあんた一回ちゃんと寝なよ」

え、そんなに疲れて見えますか？ と聞いてくる呑気な声とは裏

腹に、カイルは胸の中で、言い様のない不安が芽生えるのを感じて
いた。

第二十九話 芽生える不安（後書き）

この度は、魔王城のメイドを読んで頂いてありがとうございます。

次回からは、いよいよ三十番台という未知の領域！（部数はすでに突破してますが）

ここまで続けてこられましたのも、ひとえに皆様のおかげでございます。

これからも良ければお付き合いくださいましてでございます。
それでは。

第三十話 貴方の大切なメイドさん（前書き）

ネーターーがーなーいー

第三十話 貴方の大切なメイドさん

魔王城のメイド、前回までは

「お坊ちゃま、これは？」

「お前にやる。綺麗だったから、お前が喜ぶと思って」

「こちらでお世話させていただいて、アイルネは本当に幸せでした」

「……アイルネ、絶対にまた来い」

「……はい！」

「やだ、本当に人間に頼る気なのね」

『感度はどうだ？』

「えっ、あっ、やった、もう！ だめよ、いくら陽が落ちたからってそんな質問……」

『馬鹿、とんだ馬鹿。オカマ、馬鹿』

「ちよつと、オカマ挟んで馬鹿っていうのやめて！ それに、あたしは性を超越した魔族なの。そんな通り一遍な呼び方やめてくれな
い？」

『オカ魔族』

「えっ、何その最低のハイブリット」

「で、どうするのよこれから」

『ただの人間がノコノコ魔王城にいくとは思えん。お前はそれを探
れ』

「あの娘を調べるのね」

『徹底的にな』

「りょかい」

辺り一面に黄色い花が咲いている場所だった。

人の手が入った形跡もなく群生する花々は、風が吹く度に隣り合った葉同士が擦れて、ささやかな音を立てた。

音の中にその少年はいた。

前髪を吹かれるままにし、どこか物憂げな雰囲気で、そばかすの浮いた顔の表情からもそれが窺い知れる。

音が止むとゆっくりと手を動かして、目にかかった髪を避けた。

微かに風に乱された花の残り香が鼻腔を刺激し、一人の少女の記憶を彼に呼び覚まさせる。

「あたしが暮らしてた所では、いろんな所にこの花が咲いてて、愛する人が海に出る時、この花を送って、旅の無事を祈るのよ」

「っ……誰だっ」

思い出に浸る間も無く、突然背後から上がった声に、少年は鋭く誰何の声を上げた。

「香りが強いから、潮の匂いにも負けずに町から船までこの花の匂いが届いてね。匂いを追っていけば家まで帰れるってわけ。花を渡すのはそんな香りを忘れないようにって思いを込めて。言うなれば道標って所ね」

振り返ると、いつの間に現れたのか、背の高い男が立っていた。

冬の日の濃い夕焼けを思わせる赤い髪は、長く伸びて顔の半分を隠している。

やけに鋭く伸びた犬歯の覗く口元が、奇妙な女言葉を操っていた。「はじめまして」

金色の瞳を向けて、その男はニコッと笑った。

（これは……あれだ、オカマだ……！）

まだ多いとは言えない知識の中に、目の前の人物に該当する項目があった。

男でありながら男相手に妄りな想いを抱く種族。

弱点は不明。

何かあった時の反撃の手立て、なし。

イコール身の危険。

内心の動揺を抑えつつ、だが、抑え切れない気持ちの震えが少年を眩かせた。

「……オカマ族」

「別アプローチでそこにたどり着いたわね？」

イントネーション
発音がね、違ったからね。

頭が痛そうな顔をして、男は眉間を人差し指で抑える。

「もー、なんなのよっ？ 一目見ただけでオカマ族なのあたし？

そんな生粋っ？」

生え抜きのサラブレッドオカマ族がキキキッとなるのを見て、

少年は得心する。

話しに聞いた通り、表に出る感情が激しい。

以前、機会があつてそう聞いていた。

なんの機会だ。

「それで、お前はだー、いや、なんなんだ？」

そこまで正体不明なのかしら？ と若干傷つきながらも、彼は気を取り直した。

「……ま・ぞ・く」

挑発するように。

そういつた瞬間、少年が身構える。

「オカマ——」

「それはもうイイってのよ！」

なにか言いかけた少年を手で制しておいて、彼は髪を掻き上げた。
「全くどいつもこいつも……良い？ あたしは男とか女とかを……」

って、まあ、いいわ。そうねえ、あたしの名前はシド。坊やに話があつてきたのよ」

どこか懐かしそうに自分の名を名乗りながら、男——シドは少年にウインクを投げた。

「そうか、シド。僕にはないから帰れ」

ガン無視を伴う少年の冷たい返しにも、挫けること無く（かなり挫けかけたが）、彼は嫌味を口にする。

「なによ、坊やもあたしみたいなのが許せないタイプ？」

右斜四十五度の角度に顔を反らせてシドが言うつ、少年は小さく首を横に振った。

「他人の生き方に口を挟むほど暇じゃない。けど、お前は僕の教育に悪そうだ」

「あたしは有害図書か何かなの？」

やり返されて、がつくりと項垂れる。

しかし、ずっと項垂れている暇はなかった。

話は終わりとばかりに帰ろうとしている少年を、シドは呼び止める。

「あら、本当に帰っちゃっていいのかしら？」

「……」

無視して歩いていく少年に苦々しい視線を送りながらも、口元に笑みを作つてシドは切り札を切る。

「……アイルネ」

効果はてきめんに現れた。

少年の足が止まり、睨むような目付きで振り返る。

これまでの仕返しとばかりにその視線を真正面から受け止めて、悠々と笑つてみせた。

「——貴方の大切なメイドさんでしょう？」

第三十話 貴方の大切なメイドさん（後書き）

この度は読んで頂いてありがとうございます。

海外ドラマ風冒頭はずっとやりたかったんですが、中々機会がなかったので出来て良かったです（感想

ついに三十話です！（実質三十一話）……本当は十九話くらいで終わらせるつもりだったのに……w
頑張って四十話に行く前には終わらせたいと思います！

それでは！

第三十一話 風に消えて

足を止めて睨んでくる少年に、シドはゆっくりと近づいていった。ヒールの高いブーツが土の上に奇妙な足跡を残していく。

ただでさえ元が長身だから、近づかれることにその迫力は増していくだろう。

歩いて、彼の影が少年に触れかけた時、少年が言い放った。

「それ以上近づいたら僕は舌を噛む」

「——そこまで？」

シドは苦笑しつつ、素直に足を止めた。

辛辣な言い様には慣れている。

実は一々傷付くのだが、ともかく慣れてはいる。

アイルネの名前を出した時点で傾いた形勢に余裕の笑みを浮かべながら、シドは口を開いた。

「……ところで、彼女が、今どこにいるか知りたくない？」

ピクリと、少年の眉が動いた。

シドはそれを見逃さず、畳み掛けるように続ける。

「ヒントは、彼女の望んだ場所——」

少年は一度シドの方を見た。

「………魔王城」

子供らしくない苦々しい表情で呟く少年に、シドはにやりと笑みを浮かべる。

（………大当たり）

彼はカマをかけていただけだった。

実のところ、彼女の望んでいる事なんかこれっぽっちも知らない。アイルネが、本当に魔王城に目的があるのかどうかすら、だ。

最初に訪れた場所でアタリを引き当てた我が身の幸運と、素直な少年に内心で感謝しつつ、それをおくびにも出さずに、意味ありげな笑みを続けた。

初歩的な詐術だった。

ここでこのままべらべらと少年がアイルネの秘密を喋るなら良し、そうでなくても取れる方策は他にもある。

だが、今回幸運はそう多くはもたらされなかったらしい。

「既にウチをやめた人間だ。そんな事に興味はないな」

少年は表情を消してそう言った。

明らかに嘘だとわかる言動だったが、そう、とシドは素直に頷く。

「坊ちゃま」

「あら、時間切れね」

遠くの方から、少年を呼ぶ女の声が聞こえてきた。

どうやら、彼を探してメイドがやってきたらしい。

シドが踵を返すと、少年がそれを呼び止めた。

「待て。お前いったい何が目的なんだ」

足を止めて振り返った。

「愛よ」

即答で断言するシド。

胡散臭いものを見るような怪訝な顔をする少年に、にこりと微笑んでみせる。

「心配しなくても、坊やのメイドさん相手じゃないから。それじゃ

あね」

そう言って、ウィンクとキスを投げる。

一瞬少年の体がぐらりと傾^かいだ。

「どうして……ああ！ 見開いてるのに眼が白いッ！」

たたらを踏み、白目を向いて気絶しかけた少年が頭を振ってシドを睨んだ。

「な、何だ今の……せ、精神系の魔法か何かか」

「ただの親愛表現だったんだけど……」

真剣な表情の少年にシドは小首を傾げる。

「坊やにはちょっとシゲキが強すぎたかしら」

「どこまでも良い風に取るつもりだなお前」

そのイイ女気取りをやめろ、と、無言で訴えてくる少年に、心底心外そうなシド。

「坊ちやまゝ。坊ちやまどこですか」

なんか涙声入ってきたメイドの声を聞いて、シドは表情を変えてひらひらと片手を振った。

「ほら、応えてやらなくていいの？」

ちっ、と舌打ちをして少年がここだと答える。

その間に、シドの体の周りに風が巻き始めた。

足元の砂や枯葉を巻き上げながら、

「それじゃあ、縁があつたらまたアイましょ」

「待て、僕の質問に答える！」

風が収まった時、そこにシドの姿はなかった。

「あ、坊ちやまゝ」

バタバタ駆け寄ってくるメイドに向かって少年は手を上げた。

「ここ……って、お前なんで泣いてるんだよ」

先程まで相手にしていた魔族相手よりは多少砕けた口調で、呆れたように呟く。

ハアハアと膝に手について、やってきたメイドはほっとしたような眼で少年を見上げる。

「だ、だって、どこ走りまわっても坊ちやま全然見つからないし」

「花を見に行くって言っておいたろ」

「み、みずを……よ、横っ腹……」

「お前ちつとも聞いてないな」

横っ腹を抑えてちつとも聞いてないメイドは置いて少年は歩き始める。

「ああ、坊ちやま水を……ください……」

「やだ」

「や、やだって……」

「そんな事より、急いでカグランのクライン家に手紙を出せ」

「ええ？ な、なんてですか？ てか誰ですか？」

苦しそうにしながらも隣に並んだメイドに向かって、苛立ったように振り返る。

「アイルネの実家だ。二番目の。……あの馬鹿今魔王城に居るらしい」

「ええ〜！ アイルネさんそんな所に居るんですか？ ど、どうして？」

「うるさいな……。とにかく、クライン家に協力を求める」

「だから、なんのですか？」

「……」

躊躇うように口ごもるが、言い合いをしている場合でもないと思いい、少年は口を開く。

「何故アイルネが魔王城にいるか聞いたな。……多分、魔王を殺す為だ。そのための協力を――」

「げっ、えええええ〜！ む、無理ですよ！ アイルネさんは何考えてんですか！ てか、今まさに勇者様達がそれやろうと頑張ってくださいってる途中なんですけど……！」

オーバーアクションで叫ぶと、限界だったのか急にぐったりなるメイド。

「……よ、横っ腹……」

苦悶の表情を浮かべるメイドを、コイツ駄目だ、と見つめながら、少年は家路を急いだ。

「ふ〜ん。陛下を亡き者に、ねえ……」

少年たちが大騒ぎしながら歩いて行く道の側。

木陰から、陽炎のように影が立った。

腕を組んだシドが呟く。

「ごめんね、坊や。あたし、出来がいいのは顔だけじゃないの」
全然ごめんと思っただけでいい顔で言うシド。

だからイイ女気取りをやめろ……。

先ほど、素直に引き下がったのはこの為だった。

あの少年なら、アイルネの現状を知れば、必ず彼女の為の動きを見せると読んでの行動だった。

さすがにここまで大当たりを引くのは予想外だったが。

あのメイドちゃんに感謝しなくちゃね、と頷きつつ、表情に真剣な色が混ざる。

「それにしても、とんでもないウソつきだったのね、あの子」

短い時間見ただけだったが、とてもそんな事を考えてるようには見えなかった。

特別明るい性格というわけではなかったが、魔族に偏見を持たないところや、懸命な姿は、シドも素直に好感が持てるものだった。

アレが演技だとすれば、大した役者ということになる。

「……まあ、そういう子を他に知らないわけでもないけど」

そう言っただけ、今は沈黙している髑髏型のピアスを指先でいじった。

「ん、ちょっと、情報が足りないわね。……カグラン地方のクラインだったかしら……裏取りも含めて、行ってみる必要があるそうね」

一人ごちて、

次の瞬間には彼の姿は風にかき消えていた。

第三十一話 風に消えて（後書き）

地名とか名前考えるの本当嫌い……

第三十二話　そして

私たち結婚しません騒動から三日。

魔王城の時間は、極めて順調且つ平穩に流れていた。

平穩と言っても、魔族史上初めてのメイド――教育係の言葉を借りるなら、人間の小娘がやって来たことにより齎もたらされた”平穩”の水準の低下、もしくは時間の流れが順調であるが故に切迫する状況を鑑みるに……まあ、ド修羅場だったのである。

その内の一部をピックアップするところなる。

一日目。

いつもと変らぬ様子で現場を指揮するアイルネの元に、最近、すっかり剣や槍よりトンカチやノコギリなんかを持つことに慣れてしまった兵士の一人が「親方」と駆け寄ってきた。

親方も実はやめてほしいなあ、と思う今日この頃な心境を抱えながらアイルネは振り返る。

「どうしました？」

「それが、あの、全館掃除にあたってるリビングデッドどもが『もう殺してくれ』って泣いてますけど……」

「……」

「……」

「……どうしましょう？」

「……今日はキリの良い所でお掃除をやめてもらって、明日は半休とってもらってください」

アイルネは反省しつつ指示を出した。

流石に休みなしの連徹は死人しにでも相当辛かったらしい。

二日目。

執務室。

請求書の束の前で、全身をバタバタしながら、アイルネが地団駄を踏んでいた。

隣でカイルがまあまあと宥めている。

「うがぁ！ うがうがうがうがう！」

「……アイルネ、気持ちは分かるがトルル語になってる」
「うががう！」

三日目。

「さあ背中に隠したものを出しなさい」

「まあ、全然隠れてないけど」

手を差し出す教育係と、腕を組んでヤル気のない声で呟くカイル。眼の前には後ろに両手を回し、冷や汗ダラダラ流しながら、それでもそらつとぼける兵士の姿があった。

「な、なんのことでしょう？」

ピーピーと口笛を吹き、決して二人と眼を合わせないように視線を空中に飛ばしている。

かすかに体が動きたびに、背後で長いものが揺れていた。

「いい加減にしなさい。我々の目を誤魔化して、隠し果^{おお}せるとでも思ってたのですか？」

「そもそも隠れてないけどな」

「さあ、おとなしくその槍を渡しなさい！」

カイルを無視してびしっと言い放つ教育係に、兵士はいやいやというふうに首を振った。

飛び出す槍フロア。

仕掛けに反応して飛び出す無数の槍が、侵入者に襲いかかるとい
う恐るべきフロアだ。

そのこの槍の回収を（兵士たちは何故かこの槍をお気に入り）担
当していた教育係が、いざ回収を終えて槍を設置しなおしてみると
どうしてか一本足りない。

槍兵全員から、ちゃんと一本ずつ回収したのにも関わらずだ。

そこで、忙しそうなカイルを無理矢理捕まえて探らせてみたところ、この兵士にいきあたってというわけだ。

なんの事はない、彼は一本では飽きたらず、もう一本ストックして
いたのだった。

「大体、槍はちゃんと支給してあるでしょう」

「ち、違うんですよ！ こっちの方が重みがしっくり来て手に馴染
m……あ、いや……なんのことだか、さっぱり分かりません」

「ある意味根性がある」

「褒めてる場合ですか。こうなったら力づくで」

そう言って詰め寄る教育係に、まあ仕方ないかというようにカイル
も続く。

迫ってくる上司二人に涙ながらに兵士は首を振った。

「い、いや、やめて……な、なにも……なにも居ないったらあー
！」

魂の叫びは虚しく辺りに響き、槍はあっけなく回収された。
がくつと跪き、現実の厳しさにさめざめと泣き始める兵士。

「ああああ……そ、それを取られたら、私はこれから、なにで、
誰を突けば……」

「なにでかはともかく突くのは勇者だろ」
冷静にツッコむカイルと教育係。

こうして、飛び出す槍フロアはようやく元の姿を取り戻した。

——そして、四日目の朝。

第三十二話　そして（後書き）

最終章に向かう前の小話集。

一体アイルネはいつメイドの仕事をするんだろう…。

この度は読んで頂いてありがとうございます。

最後（大体五話くらい）もそこまでシリアスにはならないと思いますので、良ければ引き続き読んでやってください。
それでは失礼します。

第三十三話 マルゴットの体温（前書き）

すみません。

長くて暗い話になってしまいました。

第三十三話 マルゴットの体温

アイルネの父親は、街で唯一の医者だった。

人の命を救うことを人生の命題としているような男で、いつでも器具の入った医療カバンを持ち、口は悪かったが街の人間からは慕われていた。

母親の方も類友で、父親よりは口の聞き方に常識があつたが、夫婦よりも兄妹といった方がしつくり来るほど二人の生き方はよく似ていた。

患者は様々だった。

生まれや立場、貧富に拘らず診ていたから、診療代が無料なんて事もしばしばで、その事を気にするような患者を父親は「バカタレ」と逆に叱りつけた。

そんな両親が殺されたのは、彼女が十歳になったばかりの頃である。

その日、アイルネの家族は、三人連れ立って隣町を訪れていた。

隣町に住む、昔から親交のあつた貴族からの呼び出しで、風邪を引いたから、見舞いがてら久しぶりに顔を見せろという事だった。

招かれたのはアイルネ達家族全員で、さすがに自分たち二人共がいなくなるのは不味いだろうと父親は残ろうとしたのだが、準備の良いことにその貴族は使者と一緒に代わりの医者を寄越していた。

そこまでされてはもはや選択肢はない。

父親は軽く悪態をつきながらも、隣町へ行くことを決めた。

「なっさけねえなあ、マルゴット」

病床を訪れての父親の第一声がこれであつた。

貴族に向かつてそんな口をきく父親に、アイルネは内心ハラハラしつつ、ベッドに横になつた人物をうかがい見た。

ベッドの主は、父親の言葉にさして怒りを見せるでもなく、ゆったりとした動作で上体を起こしていた。

上気した頬、潤んでキラキラ光る瞳は発熱に依るものだろうが、それを差し引いて見たとしても整った顔立ちの、綺麗な女の人だった。

ほつとすると同時に、素敵な女性ひとだなあと目を奪われる。

これが、アイルネとマルゴット・クラインの出会いだった。

「貴方は、病を憎むあまり時折人を人とも思わない発言をする。私だつて風邪くらい引く」

マルゴットはさも不服そうにそう言ったが、顔には笑みがあり、どこか懐かしむような雰囲気があった。

「ばーか、そんなの当たり前だろーが。俺が言ってるのは、風邪くらいで弱気になりやがつて、うちに使いなんか出した事を言っただよ」

そう言つて、ぱちんとデコピンで額を叩く。

「あいたっ」

「あなた」

「へいへい」

さすがに母親が嗜めて、そのままマルゴットの方に笑顔を向ける。

「……お久しぶりマルゴット」

「お久しぶりレラー」

額を撫でながら、マルゴットも笑顔を返す。

何故か、二人の視線の間で、バチバチと火花が飛ぶのが見えた気がするアイルネ。

よく見ればいつものお母さんの笑顔じゃない……！

お互い笑い顔のまま、見えない戦いを繰り広げる二人から、ジリジリと後退して父親の方に近寄った。

クイクイと上着の裾を引っ張り、小声で話しかける。

「ねえ、お父さん。お母さんとマルゴットさんって仲が悪いの？」
所在無げに部屋の中を見ていた父親は、足元にいるアイルネに屈

んで身長を合わせると、ニヤリといやらしい笑顔を浮かべた。

「……ここだけの話……あの二人、昔俺のことを取り合ってたんだぜ」

それがあんまり嬉しそうに言うので、アイルネはこの人って馬鹿なのかなと思ってしまう。

「馬鹿、最低。そんな嬉しそうに言ったらお母さんが可哀想でしょ」

「えー、そーか？　だってモテる父親とモテない父親だったら、お前どっちが嬉しーよ？」

「ちゃんとした父親」

「お父さんちゃんとしてない？」

アイルネが躊躇うこと無く頷くと、首が取れそうな勢いで父親が項垂れた。

「アイルネ」

振り返ると、母親が笑顔で手招きしていた。

精神的どん底にいるちゃんとしてない父親は放っておいて、母親へと駆け寄っていく。

「あまり私に近寄ると風邪が感染るかもしれない」

「分かっているわよ。ほら、マルゴットさんにご挨拶して」

そう言って、マルゴットから少し離れた所で背中を押された。

そこには、ついさつき迄の殺伐とした空気はなく、二人共仲良さげに笑い合っている。

二人の間で、何らかの休戦協定がなされたことを敏感に察知したアイルネは、素直にペコリと頭を下げた。

「こんにちわ、初めましてマルゴットさん。アイルネと言います」

「こんにちわアイルネ。来てくれてありがとう。こんな格好ですまないね」

羽織っていたカーディガンを整え、申し訳なさそうに謝るマルゴット。

（ほんとうに綺麗な人だなあ）

ボウッと見つめてしまっていたアイルネは慌てて首を振った。

「い、いいえ、お体は大丈夫ですか？」

「うん。咳も止まったし熱も下がってきて大分調子も良いよ」

「良かった」

アイルネがほっとして笑うと、一瞬驚いたような顔になった後、くつくつと笑い始めた。

可笑しそうに片目をつむったまま、母親の方へと顔を向ける。

「本当に貴方達の子か？」

「そうだけど」

「凄く可愛い」

「……どういう意味かな？」

母親の表情が冷たくなるのを見て、ますます可笑しそうに笑うマルゴット。

アイルネは凄く可愛いと言われて、一人上機嫌で頬を染めた。

すると着ていた上着を脱ぐと、新雪のように白く滑らかな細い肩が顕になった。

まるで抵抗を感じさせずに、上着はそのまま背中の中ほどまで落ちていく。

後ろを向いているマルゴットは、腕を前で組んで胸元を隠し、片手で髪を前に回してしっとりと汗ばんだ背中を晒した。

父親が大きな手をそこに当て、撫でるように動かし始める。

「……家庭崩壊の危機だ」

「違うから」

隣にいる母親から、頭頂にズビシとチョップを落とされる。

痛む頭をさすりながらよくよく眼を凝らせば、父親は反対の手で、背中に当てた手の甲をトントン叩いていた。

「ああして体の中の音を確かめてるの」

正式には間接打診法という。

「よし、もう服着ていーぞ」

「……うん」

どこか惚けたような表情で服を着るマルゴット。

熱が上がっているのかもしれない。

その理由を思えば、恐ろしくて母親の顔が見れないアイルネだったが、意外にも母親は平板な表情かおをしてそんな光景を見つめていた。手こずるマルゴットにそつと近寄り、着替えを手伝ってやると、水差しから水を少量コップに移して、それを口にさせた。

「どこか辛い所はない？」

コクンと無言で頷くマルゴットを横にならせ、上から毛布をかけてやる。

「風邪だな。治りかけだが、死にたくなきゃ大人しくしてろ」

強盗のような文句を口にする父親に、マルゴットは笑いながら首肯した。

「ありがとう、そうする」

アイルネは、そんな両親の姿を食い入る様に見つめていた。

子供の頃から診療所の手伝いはしていた。

勿論、仕事の内容は雑用の更に手伝いが主で、だから、両親が診察している所を見たのは初めてに近かった。

（格好良い……）

素直にそう思う。

いつもとは違う二人の姿に、感動に似たものを覚えていた。

次いで、下世話な想像をしていた自分が恥ずかしくなってくる。

「それで」

アイルネが我が身に恥じ入っていると、マルゴットが口を開いた。お父さんもちゃんとしているかも、しれない……かも、と複雑な思いを抱えたアイルネはそこで顔を上げる。

「今日は泊まっていてくれるんだろう？」

宿泊の誘いだった。

勿論家族全員にあててた。

父親は首を振った。

「いや、残してきた患者もいるしな。ご招待はまた次に受けるとして今日は帰る」

「そうか。残念だ」

マルゴットも強くは引き止めなかった。

「それでは、馬車を用意させよう」

そう言つて、サイドテーブルにおいてあつたベルを鳴らす。

隣町といつても歩いて丸一日掛かる距離である。

まして、子供の足ともなれば更にもう半日余計に歩かねばならぬい。

直ぐにやつて来たメイドに馬車の手配を頼むと、マルゴットは母親に向かつて不敵な笑顔を見せた。

「本当に残念。一晩時間があれば、私もちよつとは自信があつただ」

「憎まれ口もそんな格好だとただ可愛いだけよマルゴット」

そう言つて、横になったままのマルゴットを母親は抱きしめる。

「早く良くなりなさいな」

「うん」

親しげに抱きあふ二人を指さして、「な、本当だろ？」と自慢気に自分を見てくる父親。

「アイルネ」

やっぱりこいつちゃんとしてなかった、と早くも幻滅入ったアイルネは、声をかけたマルゴットの方に歩いて行く。

「今日は顔を見て嬉しかったよ。今度はみんなと一緒に街を回ろう。案内させて欲しい」

「は、はい。私も会えて嬉しかったです」

緊張したようにそう答えるアイルネを、母親が優しく撫でていた。

「それじゃあ、またね」

「はい」

その約束が果たされないことを知らないまま、三人はクライン家を後にした。

異変が起こったのは、帰途も半ばに差し掛かった時だった。

突然激しく馬が嘶いたかと思うと、馬車が、車輪が転がる音と共に進む足を止めた。

馬車の外からは誰かが言い争うような声が聞こえてきていて、同時に何か鈍い音が響いていた。

アイルネはその時、母親に抱きかかえられるようにして眠っていた。

今日一日の疲れが出たのだろう、馬車に揺られて十分としない内に瞼が重くなつていき彼女は眠りについた。

「……お……達……でも逃……」

アイルネが目覚めたのは、自分を抱きしめる母親の腕に力が籠ったのと、父親の深刻そうな声が聞こえてきたからだだった。

「……どうしたの？」

まだ眠りに未練のある眼をこすりながら、アイルネは父親に尋ねた。

「アイルネ」

自分の名前を呼ぶ父親の顔を見て、一瞬で目が覚めた。

初めて、なにか良くないことが起こっていることに気がついた。

「な、何があったの？」

アイルネは辺りを見回すが、馬車の窓はカーテンが降ろされていて、外の様子はおろか中の状態すら暗くて正しく窺うことができない。

「良いか、今からお前がするべきことだけを言う。よく聞いてちゃんと守れ、良いな？」

困惑しながらも頷こうとした時、強い力で馬車が揺れた。

「きゃあー！」

思わず叫びそうになったアイルネの口を抑えて、母親が悲鳴を上げた。

それを見て、父親が諦めたような顔で、敷かれた絨毯をめくる。床が剥き出しになる。

木で組まれた床が見えたが、目的は座席の下部分だった。

父親が、同じく木板で出来たその座席の下部分を強引に取り外すと、座席の下にポツカリと暗いスペースが出来た。

「お前はここに隠れるんだ。目を瞑って、耳を塞いでろ。多少狭いが我慢して、出来るだけ静かに、何があってもここから出てくるな。分かったな？」

こくこく頷くと、父親は一瞬ほつとしたような顔をして、母親ごと彼女を抱きしめた。

「いいか、忘れるな……モテる父親は自慢でき——いてえっ！」
どうやら母親に頭をド突かれたらしい父親は、体を離すと、にっこりと笑って愛してると言った。

母親はアイルネを抱きしめていた腕に一瞬力をこめてから体を離すと、頬にキスして愛してると言った。

アイルネは棺桶のように狭い椅子の下に入りつつ、自分はもう二度とこの二人に会えないんだと思いながら、私も愛してると言った。胸がつぶれるほど悲しかったが、彼女は泣くのを必死で堪える。

父親との約束を守るつもりだった。

座席の下に入ると、父親が木板で入り口を塞いだ。

絨毯が元に戻され、僅かに入り込んでいた光が閉じて暗闇が訪れる。

アイルネは暗闇の中、自分のやるべきことを思い出す。

そうして、出来るだけ静かに、耳を塞いで——目を瞑った。

次に気がついた時、アイルネはマルゴットに抱きしめられていた。
「アイルネ！」

思い出せるのは、誰かが自分を暗闇から出した事。

その時に開いていた扉から、微かに見えた赤い地面と、動かなく

なつた父親と母親の姿。

それから、必死で自分の名前を呼び、泣きながら自分を抱きしめるマルゴットの、少しだけ熱い体温だけだった。

第三十三話 マルゴットの体温（後書き）

読んでいただいて、ありがとうございます。

第三十四話 教育係、右拳で顔の中心を殴られる

やけに印象に残っているのはその口元。

アレはいつの事だったろうかと、アイルネは幼い頃の記憶を探る。顔の下半分から胸元だけが見える女性。

腕の悪い写真家から、不本意に切り取られた一枚のような光景。

その相手がマルゴットだったことまでは確信が持てるものの、あれは何時何時のどこだったかと考えると、記憶は途端に曖昧になる。相手がマルゴットである以上、少なくともクライン家にいた頃だということとは分かっている。

なんとなく、マルゴットに引き取られてから、そう時が経っていない頃ではないかとも思うのだが、自信はなかった。

なにせ、あの頃の自分ときたらいつも下ばかり向いているような子供だったから。

ならば、印象に残っているマルゴットの姿も、記憶を元になら作られた映像なのかもしれない。

形の良い唇が開いた。

わずかに赤みがかっていて、小さく白い歯がこぼれた。

私は（・・・）、なんと問いかけただろう。

あの頃の私はずっと塞ぎ込んでいて、周りの人達にはそれが許せなかった。

「せっかく助かった命を大切にしなさい」

「ご両親が、君がそうして下を向いていることを、本当に望んでいるとも思うのか？」

「きつと、お父さんとお母さんは君が全てを忘れて、前を向くことを望んでいるよ」

今なら分かる。

それがとても優しい想いだったことが。

だけど、当時の私にはその事がよく分かっていなかった。

……だから尋ねたんだ。

ただ一人、一度も私にそんな事を言わなかったマルゴットに。

「本当にお父さんとお母さんは、私が全部忘れてしまうことを望んでるんでしょうか？」

マルゴットは、一度きゅつと唇を引き締めると、悲しそうに、わかない、と首を横に振った。

「……死んでしまった人が何を望んでいるかは、生きている人間が決めるしかないんだよ」

彼女は優しい声で、私が安易に答えを得ることを許さなかった。

「レラリー達は何を望んでいるか。ゆっくりでいいから、それを考えてみるといい」

そうして、私はようやく顔を上げた。

答えはまだ出ていない。

だから、悪夢を見た朝は、決まってアイルネを少しでも憂鬱な気持ちにさせた。

アイルネの旅は、そのまま復讐の旅であり、答えを探す旅でもある。

それらの手がかりとして、両親の仇を探し、各地を転々としていた。

メイドという仕事を選んだのは、それ以外、特技といって他に思いつくものもなかったからだ。

マルゴットは、両親を殺したのは誰だか分からないと言った。

あの日、アイルネたちを載せて出かけたはずの馬車馬が、たった一頭だけで街に戻ってきたと知らされて彼女は異変に気がついたらしい。

兵を連れて慌てて駆けつけたものの、全ては終わった後だった。犯人の姿はなく、遺体の中に両親の姿を見つけ、呆然としていた

所でアイルネの姿がないことに気がついた。

一縷の希望が湧くのと同時に、もしや攫われたかとも思ったが、結局、馬車の中から彼女を発見した。

だから、両親を殺したのが誰かは分からない、と。

アイルネは、ただ黙って、頷くこともしなかった。

その後、ごたごたと雑多なことが、いくつもアイルネの周りを通りすぎていった。

それらをほとんど無関心に過ごし、近くに親戚もいなかった彼女は、結局マルゴットに引き取られることになる。

下を向くのをやめたアイルネは、クライン家のメイドとして働き始めた。

マルゴットからは気にしなくて良いと言われていたが、住まわせてもらっている以上は何か力にならなければと思った。

これからはクライン家の一員だとまで言われたものの、それと、それに甘えることとの間には、ナイフ一滑り分以上の乖離があるようにアイルネには感じられた。

頑ななアイルネの態度に、ようやくこれが彼女の性格の問題だと気がついたマルゴットは、渋々それに了承し、アイルネがメイドとして働くことを許してくれた。

アイルネは喜んだ。

正直な所、塞ぎこむということをしなくなると、どうにも暇だったのである。

ただ、そうなった以上、暇つぶしというには、マルゴットは厳しかった。

一切の妥協は許さず、仕事中は他のメイドと変わらずに接することを徹底した。

それはアイルネも望む所で、中々体育会系の関係^{けい}をこの義理の親子は築いていった。

そうして、周囲の支えに助けられながら、彼女は日常と笑顔を取り戻していく。

決着のつかない個人的な感情の部分が、だからこそ歪んでいったのは、皮肉としか言いようがない。

マルゴットの家族や屋敷の使用人^{メイド}たち、新しく出会う街の人々は、優しい人達ばかりだった。

あれほど耳についた言葉の数々も、不思議と気にならなくなっていた。

そういう出会いがある度に、彼女の想いは徐々に一つに定まっていく。

”『人間』は優しい。こんなに優しい『人』たちが、両親を殺したりするわけがない”

それは大いなる誤解だった。

ただ、犯人が見つからないこともあり、それを正すだけの材料が何処にもなかった。

おそらく盗賊かなにかの仕業だろうと言われているも、犯人は結局捕まること無く、またその正体も不明のまま。

それでもこの頃から、アイルネの中に、はつきりと魔族を憎む心が芽生え始めていた事だけは確かだった。

四日目の朝。

見覚えのある光景は、彼の所有物である魔王城のものだった。その大広間で一人、彼は首をかしげている。

（にやゝ、皆……何処に行ったのかな？）

誰もいない大広間は、うらびれていてやけに寂しく見える。

「あ」

心細く辺りを見回していると、広間の入口辺りで、ようやく人影

を見つけた。

表情を華やかせながら、おーい、と駆け寄るものの、その人物は後ろを向いていて、こちらを振り返る気配もない。

それでも構わずに声をかけ続けながら、魔王陛下は彼の後ろに立った。

光沢のある綺羅びやかな鎧を身につけ、立派な体軀をしたその人物に、魔王陛下の期待がいや増した。

「ねえねえ、君誰？　もしかして勇者さん？」

ワクワクした眼で尋ねると、その人物が小さくコクリと頷いたのが分かった。

「にゃ！　本当っ！？」

再び、コクリ。

「ねえねえねえ、こっち向いて？　どうしてなにも言わないの？」

いかにも落ち着かないといった様子で、その人物の体を揺さぶっているとおどろおどろしい声が返ってくる。

「理由を知りたい……？」

「うんうん」

「そう……それはね……」

体から手を離して、律儀に頷く魔王陛下の前で、その人物はゆっくりと振り返る。

「今からお小言を言うつもりだったからですよー！」

「にゃ”あー……！！！”

魔王陛下は叫び声をあげていた。

振り返ったのは、唇がカサカサの青い顔をした教育係だった。

いつの間にかやけに小さな鎧を身に纏い、カカシのような姿でこちらにゆらりゆらり近づいてくる。

全身を総毛立たせながら、一歩後退しようとする魔王陛下。

が、何故か足が動かない。

「ひい……」

思わず悲鳴が溢れた。

足元を見ると、そこにはもう一人青ざめた教育係が足にしがみついていた。

「言葉遣い」

魔王の背中をぞわぞわ〜と悪寒が走ったかと思うや、ドンと何かが腰にぶつかってきた。

嫌な予感がしつつそつとそちらに目をやる。

案の定、そこには三人目の教育係がいて、視線が合うとニタリとこちらを見て笑った。

「ご自分を呼ばれる時は余か俺様と仰ってください」

「きやああああああ〜」！

絶叫。

まるでその声を聞きつけたように、部屋中から教育係の恨みがましい声が響き始める。

「はい、そこで相手を嘲る笑いを」

「違います」

「それは日々の暮らしの中で小さな幸せを見つけた時の高笑いです」

声だけでなく、気がつけば体中に教育係が纏わりついていた。

完全に動けなくなつた視界の中で、カカシの教育係が、相変わらずゆらゆらと近づいてきていた。

不気味な笑顔を浮かべながら、折れてるのかな？ 首が変な方向に傾いている。

一歩歩くたびにサクラノボのように首が揺れ、唇もカサカサだった。

やがて、不自然に上半身がねじれて、ぴんと伸ばされた腕で肩を掴まれる。

木の虚のような口から、音が溢れた。

「そろそろ起きて下さい陛下」

「陛下、陛下。そろそろお目覚めになってください」

目を覚ますと、こちらを覗き込む教育係の顔があった。

一瞬、まだ夢の続きのような心地がして、泣きそうになりながら（ちよつと泣いた）はね起きた。

「どうなさったのですか？ 陛下！」

そんな魔王の態度に、目の前の顔が不安気に歪んだ。

体調を心配して、直ぐにでも医者を呼びかねない勢いで顔を近づけてくる教育係。

魔王陛下は、ベタベタと全身を触られながら、彼をじっと観察する。

……いつもの教育係だった。

有効に活用されたことのない整った美貌は血色も良く、艶の戻った髪には、朝日を浴びて無駄にエンジェルリングが輝いていた。

青白い顔もしてないし、むやみに沢山いたりもしない。

見慣れた礼服姿にホッと安心すると、不安と入れ替わるように、直ぐに腹が立つてきた。

涙目のまま、ぷくーっとホッペタをふくらませる。

大丈夫ですか？ と心配そうに目を合わせてくる教育係に、魔王陛下は右拳を振り上げあそばされた。

「鎧が小さすぎ！」

「どうしてそれぐはっ」

この日の早朝、魔王陛下の寢所では、顔の中心を殴られる教育係の姿が見られたという。

第三十四話 教育係、右拳で顔の中心を殴られる（後書き）

この度は読んで頂いてありがとうございます。

魔王陛下が久しぶりに出てまいりました。
ねじ込みました。

正直、どう扱っていいかが分かりませんw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8823s/>

魔王城のメイド

2011年11月4日08時18分発行